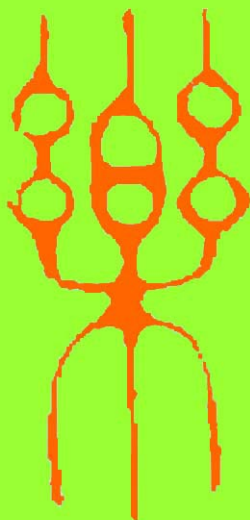


京都市立芸術大学

日本伝統音楽研究センター 所報

第3・4合併号 2004年3月

ISSN 1346-4590



Newsletter
of the
Research Centre for Japanese Traditional Music
Kyoto City University of Arts

Nos. 3 & 4 March 2004

京都市立芸術大学

日本伝統音楽研究センター 所報

第3・4合併号 2004年3月

ISSN 1346-4590

目次 CONTENTS

所長対談 京都市立芸術大学学長 西島 安則 氏にきく	3
The Director Interviews the President of Kyoto City University of Arts, NISHIJIMA Yasunori	
エッセイ Essays	
ハタと手を打つ	久保田 敏子 12
Hand Clapping in Japan	KUBOTA Satoko
地方に息づく舞楽 —未来にむけての挑戦—	高橋 美都 14
<i>Bugaku</i> Music and Dance Alive in the Country: New Creation for the Future	TAKAHASHI Mito
センターニュース	16
Centre News	
日本伝統音楽研究センター 概要 2002.....	41
Guide to the Research Centre for Japanese Traditional Music, 2002	43
日本伝統音楽研究センター 概要 2003.....	46
Guide to the Research Centre for Japanese Traditional Music, 2003	48
編集後記	51
Editorial	

Newsletter

of the

Research Centre for Japanese Traditional Music

Kyoto City University of Arts

Nos. 3 & 4 March 2004 ISSN 1346-4590

所長対談

京都市立芸術大学学長 西島 安則 氏にきく

日時：2002年11月6日（水）

場所：京都市立芸術大学学長室

聞き手 廣瀬 量平

◆異色の学長

廣瀬 西島先生には、平成10年4月1日から私も京都市立芸術大学の学長をお願いしておりますが、先生は、それ以前に京都大学の総長もなさっていらっしゃいました。

京都大学工学博士でいらっしゃいますので、これ迄はほとんど、理系の道を歩んで来られたことになってますが、先生は大変に幅広くていらっしゃいます。それでも更に、分野の異なる芸術大学に来ていただいたのは、とても嬉しいことでした。

西島 私にとっても、京都芸大に来たことは、素晴らしい経験をするようになって、本当に有難いと思っています。

昨日も、伝統音楽研究センターの『所報』の「所長対談」を読み返していました、「第1号」の吉川英史先生との対談では、日本の伝統音楽とは何か、ということがずいぶん奥深く書かれていましたし、「第2号」の梅原猛先生との対談でも、西山文化ということもできていますけれど、日本文化の流れの中で「伝統」ということ話していただいていますね。

廣瀬 今日は「大学とは何か」ということと「大学は教育機関なのか研究機関なのか」といった辺のお話をお願いしたいと思っていますんですが。

◆大学とは

西島 大学というのは、どンドンどンドン育って来てるんで、どっかで停めて考えるのは難しいですね。また、同時に、大学というのは、非常に多様性があるんですね。良い大学、悪い大学という意味じゃなしに、学風というものを持ってこそ大学といえますから、これも、幅が広い。共通して言えることは、大学の一番の原型は「先生の家」ですわ。一人の先生の所に、あの先生は良いお話をされる。色んなことを教えてもらえるし、話を聞いているだけで楽しい。あそこに集まっているお弟子さんの中に自分が加わるだけで、自分は嬉しいのだ、という人がどンドン集まってきて……。

廣瀬 松下村塾みたいに。

西島 松下村塾もそうですし、一つの時代を創る滝のようなときには、特にそういうのが目立つんです。

廣瀬 ポローニア大学もそうですね。

西島 ポローニア大学も、一番最初は法律、いわゆる教会法と民法の大先生がそこに居て、ヨーロッパ中から集まっているんですね。

廣瀬 ということは、西洋中世法制史の堀米庸三先生の仰るように、国王領で教会の司教の任免権はどうなるのか、といったことなどのトラブルが各地で起こったので、それに対応するための慣習やその解釈を研究するために、集まったんです



ね。ウニヴェルシタ *università* という言葉のとおり、大学とは国際的なものですね。

西島 ええ、あれは一つの組合ですね。学問を中心とした。

廣瀬 ポローニア大学は、世界で一番古い大学ですね。

西島 まあ、大学という意味では一番古い大学ですね。でも、古代ギリシャも含めると、何ほでも古いものがありますからね。余談ですけど、何百というヨーロッパの大学が町の中をパレードする時は、ポローニア大学が先頭で、だいたい古い順なんです。で、900年記念パレードの時、「西島さん、あんたがこの大学はどうや」って聞くと、「いやあ、京都大学っちゅうのはそんなに古くはないけど、京都の大学というなら、空海が始めた学問所なら、平安時代のごく初めです」と言ったら吃驚されて、「それなら、ポローニアのもっともっと前を歩いてもらわんといけませんな」なんて冗談を言っていました。その時、「900年という長い歴史で、一つの大学がずっと続いてきたということは素晴らしいことですが、何で今年が900年なのか教えて欲しい」と学長に尋ねましたら、「いや、それは非常に簡単なことです。100年前に800年だっ

西島 安則 (にしじま・やすのり)

平成10年4月1日から京都市立芸術大学学長。昭和24～29年京都大学大学院特別研究生、28～31年ブルックリン工科大学高分子研究所留学、37年京都大学工学博士、34年同大学講師、37年ブルックリン工科大学客員教授、38年京都大学助教授、44年同大学教授、50年同大学学生部長、54年同大学工学部長、60年～平成3年同大学総長。同大学名誉教授、4～7年日本ユネスコ国内委員会委員長、5～6年日本化学会会長、6～9年日本学術会議副会長、4～5年京都市大学21プラン策定委員会委員長、現在、日本WHO協会会長、国際高等研究所顧問、(財)京都府国際センター理事長。ポリテック大学(元ブルックリン工科大学)名誉理学博士、サセックス大学名誉理学博士、トロント大学名誉理学博士、シエナ科学アカデミー名誉会員、日本化学会名誉会員、高分子学会名誉会員、英国化学工業会よりプレジデント・メダル受賞。

たんだから」と言うんです(笑)。

これは非常に明快な答えでした。その時、色々議論をしたのですが、何処でも元は、「先生の家」でした。それが大学という *university* を創るというのは、都会というのか、歴史の状況における「町」の真ん中の、一番良いところに先生を集め

て、ポローニアにはスペインなんかからでも学生がたくさん来たんですね。あの辺の土地は、トスカーナ古戦場でして、丘のてっぺんには必ずお城か僧院か教会があって、登っていく螺旋状の階段の道に添って、民家がいっぱいあるんです。その中の一つの教会、それは宗教改革の前の13世紀か14世紀の教会なんです、壁に彫って書いてあるんです。

「ここで神は人となる。而して人は神となる」と、ものすごいことが書いてあるんです。これが「人間の最高の自由の悟り」やと思うんですよね。あの辺の土地にそういう雰囲気があったようです。自然科学的には革命を起こした所で、初めて科学者の眼ではなく、文化の眼になったんだと、あの時初めて思いました。コペルニクスにしてガリレオ・ガリレイにしても、ものすごい敬虔なキリスト教の信者でしたから。そういう所でuniversityができたということに、一つの意味があると私は思うんです。

「先生の家」は世界中にいっぱいあったんでしょうが、都市国家の市民が、町の中心の良い建物を「先生の家」に使ってもらって、町の中に世界中から集まって来る学生のための寮とかも作ることで、町が単に交通の要所、商売の中心というのではなしに「文化都市」と言えるんだ、という雰囲気がuniversityを創り出したんだと思います。

◆大学の役割

西島 そういう点で、京都市は恵まれてると思います。僕は、京都市が、京都市立芸大を何でもっとも大事にせえへんのかと思いますね。それは、京都市の行政の事を言っているのではないんですが、京都市民という意識の中ですね。

あの頃のポローニアにしても、決して他の町に比べて非常に豊かだったとは思えんわけです。なにであれだけのことをやったんです。フィレンツェも、シエナ

もそうですが、次の時代に、いわゆる文化戦争がいっぱい起こるわけですね。その時に、宗教的にも、芸術的にも新しい時代が生まれるエネルギーができたんです。

で、大学というのは何なの、ということですが、私は、一番の原型は「先生の家」で、それが大学になるためには、それを大学に育てる地域の風土なり、人が必要なんです。そうしてできた大学の役割というのは何かというと、大学は、単に教育だけではないんです。何かを伝授するためだけだったら、「先生の家」だけですけど、それだけではないかんです。大学は、やっぱり、学問を次の世代のために創造せにやいかん。

これは何も、ひつつけたり、離したり、新しい名前を考えたり、専門技術で分別さすというような意味ではなしに、人間の学問というものを作り上げる責任がある。それが出来るから、人は大学を尊重してくれる。そういう意味では、今の大学改革のあり方には、僕は非常に大きな疑問を感じてるんです。

いかに学問をうまく経営に結びつけていくか、ということが大学の社会貢献の一番大事なことのように言われますけれど、そうではないんです。大学の社会貢献というのは、文化の核を立てるための学問を創造すること、そこにあるのではないかと思います。

◆日本の大学の原点

西島 日本の大学は、平安時代の前からあったのですが、これはいわゆる職業教育ですよね。空海が帰ってきて、綜芸種智院を作った初めて、ここは坊さんを作る「大学」になったのではないのかと。一般教養の……。

廣瀬 森羅万象、すべて……。

西島 全部。もう、道教も儒教も仏教も神道も、何でもとにかく。自然と人間とあるいはそれを超えた……。

廣瀬 宇宙論から生命論までも……。

西島 大乘仏教の根源をさらに追求した一つの思想でしょう。しかし、これは空海の死後数年で消えて無くなってしまい、東寺さんの養成所になってしまう。現在、元のこの名前を継いでいる大学がありませんけど。

もしも、空海のこの思想が存続していたら、日本に本当の意味での大学ができたと思うのです。本にも書いてありましたが、「とにかく良い先生を集めないといかん。仏教の人とそうでない人の比較で新しい学問を作らないといけない。学生には最高の講義のできる先生を用意し、若い学生が生活の心配をせんように、食事から住居から、全部を用意して……」ということ。

廣瀬 壮大ですね。

西島 それがもしも京都に当時、できあがっていたら、本当の意味での大学だったと思うんです。

◆近代の日本の大学

廣瀬 昔のことは、別として、明治から始まった西洋直輸入的な日本の高等教育ではどうでしょう。

西島 これは森有礼が文部大臣になる前の話ですが、最初の大使としてアメリカのワシントンに赴任していたときの話ですが、「日本の教育は如何にあるべきや」とあちこちに手紙を書いたそうです。

アメリカの大学の学長や教会の司教さん、実業家、上院議員……いろんな人の意見を集めて日本の大学や教育現場に持ち込ませたそうです。

廣瀬 森さんといえば、「日本語を止めて英語にしよう」って言い出したことでも有名ですね。

西島 そのことについても、「教育の効率がいくら良くても、文化が破壊されるので非常に危険である」と、アメリカ人に言われたそうです。あるイギリスの植民地で英語の読める上流階級とそうでない下

層階級に分けた結果、その地域の一番良い文化を完全に破壊したことがあったので、森さんも考え方を改めたようです。

日本でも大学の教育を全部英語にしていたら、日本の伝統文化は破壊されてしまったでしょうね。

余談ですが、マレーシアは植民地時代に英語の教科書を全部マレー語に翻訳したそうです。今では、効率が悪すぎたので全部英語で教育されていますがね。多民族国家なので日本とは事情が違うのですが、高等教育の言語っちゅうのは、よほど慎重でなければならぬと思います。

いずれにしても、日本は文明開化の時に、東京大学、京都大学、といった帝国大学を作ったんです。それは、新しい国家建設のためのものだったのです。

廣瀬 ポローニア大学のように、国益に関係なく真理を追究するという点が違ってきていますね。

西島 大分違います。ポローニアの時は、いわゆる「先生の家」を、学問の府にするという力が、市民から湧き出たわけですね。

廣瀬 それで、スペインからも人が来て、ネーデルランドからも、当時のヨーロッパ各地から人が来て、そこで皆が集まって……。

西島 日本は「文明開化」、これは良いと思いますが、けれども「富国強兵」のための大学でした。そういう意味では、成功したわけですね。成功ちゅうのか……。とにかく、あんな短期間のうちにあれだけ西欧化した原因は、ちょっとわからんですけど、初めはアメリカ、イギリス、フランス、ロシア、最後には新興国のドイツや、ということになりまして。幸いにして、国家主義的な大学を創る時であっても、お手本にしたドイツの中に「大学の自治、学問の自由」というモットーがあったんですね。もっとも、政治の方ではそれは謳い文句だけで、実現するのは、随分後になりましたが。その中に「教育・

研究の一体化」というのがあって……。

廣瀬 教育と研究の一体化ですね。

西島 つまり、大学は最高の学問の府であるから、先生と学生が一緒になって新しい学問を構築していくのだということ、この頃よく言う「知の創造」ということです。これは、ご存じのようにベルリン大学ができた時のフンボルト Karl Wilhelm von Humboldt の思想の中にもみられます。

しかし、ドイツではそれから10年ぐらい経って、次のような思想が出てくるんです。「研究というのは教育の片手間にやれるものではない。大学の教育というのは、研究の片手間にやるべきものではない。」という考えが出てきたんですね。同じ国で、同じ思想の中で、「教育と研究は一体だ」という考えと、「そうでない」という考えが出てきました。それから一世代越えて、カイザー・ウィルヘルム Kaiser Wilhelm の時に、「国立研究所」ができたんですね。そこは、機構としての教育機関と、研究機関だけではないに、人としては、つまり学者としては両方を兼ねることができると。カイザー・ウィルヘルムの所に自分の研究室を持って、最高の設備で、最高の弟子たちを使って研究ができ、その人が、同時に今度はベテルブルクの大学で講義もできるというものでした。一人の人が研究か教育のどっちかしかでけん、ちゅうことではなかったんですね。これは、自然科学と工業に関しては成功だったと思えるんですが、芸術に関してはどうでしたかね。

◆日本における音楽の高等教育

廣瀬 芸術に関しては大学でやってませんでした。「音楽大学」と記されているホッホシューレ Hochschule、つまり、高等専門学校です。フランスでは、コンセルヴァトワール conservatoire です。

西島 コンセルヴァトワールっちゅうのも総合教育的になったのは後の時代のこと

ですね。

廣瀬 あれはフランス革命の後にできました。それまで宮廷の職人楽人を養成したものを、革命政府がすることになったんです。しかし、やはり芸術教育は専門学校で、という考え方で。

西島 コンセルヴァトワールでは、音楽教育は如何にあるべきか、ということでカリキュラムを次々に直していったそうですね。

廣瀬 コンセルヴァトワールというのは原則として一科目しか履修しません。和声法なら和声法、作曲なら作曲、それだけです。その一科目の卒業試験に合格すれば、基本的にはコンセルヴァトワール卒業生ということです。翌年また必要な科目を学ぶことは出来ますが……。

西島 僕もよく考えるのですが、「日本の音楽の高等教育というのはどこからきたのか？」ということ……。

廣瀬 明治の初めはアメリカから、教育音楽の専門家を招いて、音楽教育家を養成しようとした。その後は、ドイツから教師を招き、ホッホシューレのようなものを取り入れていった。それを今度の大战後の大学統合の一環で文部省が一括してしまったところからきているのではないのでしょうか？ つまり、文部省が音楽・美術という二つの専門学校を併せて国立の芸術大学にしてしまったんです。

西島 ウチの身近な例では堀川高校の音楽の専門課程と短期大学に移る過程と、それから芸術大学になる過程と、いくつも試練を越えてきたんですね。

東京芸大の前身の東京音楽学校では、もともと、日本に西洋音楽を入れることを出発点としていましたね。

廣瀬 初めは日本音楽も入れるつもりだったようです。しかし、一般教育の唱歌の教師を養成することも目的だったんです。

西島 師範学校ですかね。

廣瀬 大学という名前が問題だったんです。アメリカでも、ジュリアード音楽学校では実技を学ぶ。それで足りないと思う人

は、コロムビア大学へでも行って、理論面を補うんですね。日本は、全部の音楽学校が音楽大学になっちゃったのが、問題なんだと思いますね。

西島 それから、いわゆる university での「教育と研究の一体化」の中で、相当近代までの理工系の研究の中では、理論 theory だけで、ラボラトリーでやる実験は無かったんですよ。

廣瀬 そうですか。ガリレオなんかは？

西島 ガリレオはその草分けなんですよ。学校のカリキュラムなんかでも実験で確かめるといことは、ガリレオ・ガリレイの本を読んで感激した若いイギリスのボイルの法則で有名なロバート・ボイル Robert Boyle が、オックスフォードで始めたんです。初めて、ナチュラル・フィロソフィに「実験」というものを入れたんです。しかも、「客観的」でなくては、ということで、必ず複数の人が別々にやって、データを付き合わせるという、「学問としての実験」のありかたを確立させたんです。それから自然科学はすっかり変わりました。錬金術でなくてケミストリー、星占いではなくて天文学という風に。

で、芸術教育なんですけど、浅はかな考えかもしれないんですが、自然科学の中で育ってきた人間にとっては、研究のなかに実験と理論があり、同時に教育という行為が共存して、自然を客観的にみることに繋がります。このように自然に対して外側に求めているのに対して、芸術は自然に対して、その人の感性などの内側の方向に求めていくものなので、自然科学から見て、「芸術の研究所」というのは一体、何なのか？ということになります。

◆大学の研究所

廣瀬 理科系の研究所と文化系の研究所とはちょっと違うと思いますが……。

西島 ただねえ、大化学者のパスカル Blaise Pascal が言うには、「原理」という

のは、今発見されたとしても、それは「発見」でも何でもないので。真理は昔からそこにあって、真理探究に関しては、理科系も文化系も差はないのだ、と。

廣瀬 故きを温ねて新しきを知ることもありますし、単純素朴に聞こえる日本民謡にも、ちゃんとした法則があることを発見したり……。

西島 そうですか。京大に初めて独立した研究所ができたのが、大正15年の「化学研究所」でした。これは、当時の先端を行っていたドイツを敵にまわしてしもたんで、特に「薬」の面で、どないもならんようになりまして、それで造った研究所なんですよ。これは、薬学も理学も工学も農学も医学も全部含めた総合的なケミストリーを扱う研究所でした。

次にできたのは、「人文科学研究所」でした。これは、昭和14年か15年でしたが、「日本的学問」と「東亜文化」という、どちらも帝国大学の国策でできあがった研究所でした。

成熟していくとそれぞれの道を歩むわけですが、「ケミストリー」の方は、非常に積極的に、理工農医薬学部の先生方や学生たちとの連携の「総合の要」として発展しますが、「人文」の方は、学生にうるうるされては困る、これは専門中の専門家がプロジェクトを組んで、桑原武夫さんなどのような新しい研究を行う方向に向かっていきました。ここでは、社会から、経済から、文化に至るまで学部や大学などの枠組を越えた総合研究ができました。

「東南アジア研究センター」などは戦後のアメリカのフォード大学に倣ったのですが、アメリカの東亜支配の先兵のような事を引き受けたので、ここが出来る時には学生運動の血が流れたんですよ。

平成3年に設立した「大学院人間・環境学研究所」は、初めての独立研究科なので学部が無いんです。ある意味、研究所みたいなもんです。これは、学部を足す括れない独立の大学院で、私が学長

と兼任で研究科長になったんです。旗揚げまでに、10年近く議論したんですわ。一番の中心は、「人間の存在論」ですわ。いわゆる環境汚染とかといったレベルではなく、もっと、人間の根元に関わる研究ですから、文化も理科もないわけですし、過去も未来もないわけですわ。そんな研究科にするためには、先生は学生と一緒に研究をやらなければならないのです。今流行の「シラバス」とか、「カリキュラム」っちゅうようなものは、既にエスタブリッシュされたものを、如何に効率よく次の世代に渡していくか、ということですから、これから何か創ろうというときには、そんなものでは縛れないんです。結局は、学生というよりは、若手の共同研究者と一緒に創っていくものだとということです。

本学で言えば、音楽にも美術にも属さない、どこの学部の上に乗っているわけでもない、オープンな「京都市立芸術大学独立研究科・日本伝統音楽」とでもいうものではないでしょうか。全くの仮想ですが、例えば雅楽を研究する人、楽器を研究する人、舞の装束を研究する人、歴史、音楽、絵画といった、あるいは、仏像を研究する人など、どの分野、どの学部からでも、他大学からでも、社会人でも、研究者の卵として学生に採るんです。

廣瀬 いろんなタイプの研究所がありうる、ということですね。

西島 今挙げた三つのタイプ、つまり、一つは、研究者も学生も専門の枠を越えて一体化し、先生も兼任してでも「ケミストリー」なら「ケミストリー」という共通の視野で集まって研究するタイプと、今一つは、大学の中にあっても、学生の教育という縛りから離れて、本当の意味での専門家がプロジェクトを組んで、学際的な研究をするタイプと、もう一つは、大学院なのだけれども、どの学部の上に立つというものではない、独立した研究所タイプの「大学院研究科」の三つのタイプの他に、今一つのタイプとして、「国

際日本文化研究センター」のような「共同利用研究所」がありますね。国立の場合は「全国共同利用研究所」と謳えますけど、公立の場合、特に京都市の場合ですと、市がどれだけ度量を持つかが決め手ですな。京都市立の「全国利用研究所」ができれば京都市も大したもんやが。こうなると、日本だけではなく、世界中から研究者が集まって研究する。予算の中にそうした人たちの渡航費から宿舍から滞在費からみんな含めて、大学を超えた枠の中で独立した研究が行える独立研究所です。

廣瀬 京都大学には35、東京大学には49もの研究所があるそうですが、この京都芸大には、これまで研究所が無かったものですから、私どものような独立した研究施設については、今でも、なかなか理解が得られ難いんです。

西島 一つの学部とか教室とか講座とかの枠を越えるのが「研究所」ですが、問題は、一つの大学のプチ研究所になるか、共同利用研究所になるか、独立研究科になるかです。

◆教育と研究

西島 もう一つは、「教育と研究」ということですが、研究センターで教育も研究もやるとすると、研究の方が何かに括られてしまわないか、という懸念もあります。先程も言ったように、カリキュラムとかシラバスとかに縛られて、音楽学の大学院と揃えてしまうと、もう、研究所ではなくなってしまうという危惧です。学生というよりは、若手研究者と創っていくのだということです。「日本伝統音楽とは何か」などというそんな大きな海の中へ、院生を入れて「さあ、好きなように泳げ」と言うには無理がある。今は、研究所のスタッフが、非常にケアフルに慎重に、研究者、これは演奏家でも外国の方でも、若い研究者でもいいんですが、相手にきちんとしたステージを拵え、共同研究者

として共同研究を行っていったなら、その上で大学院というものを視野に入れる時代がやってくるであろうということは十分理解できます。そこを、固まった頭で「日本伝統音楽とは？」といった「邦楽の定義」みたいなお題目に縛られると……。

廣瀬 邦楽の教習所みたいにもなってしまうかもしれない(笑)。

西島 話は飛びますが、この間、片岡先生の御葬儀の時に、先生自身の声の声明が、ずっと聞こえていたんですがね。

廣瀬 はい、あの片岡義道先生の……。

西島 僕は魔法にかかったように引きずり込まれて、声明の魅力に改めて感動しましたね。それと、あの時初めて気づいたんですが、雅楽に使われている楽器の音が、人の声とぴったりして、人の声と楽器の音が解け合ってすーっと入ってくるんですね。ルーツを探るのもいいが、ああいう感動をもっと多くの人が持たずらぶん違ってくるのではないかと思います。息子さんが言うてはるには、お風呂の中で稽古してはったとかですが。

廣瀬 片岡先生は、私が赴任してきた時に音楽学部長でいらしたんですけど、大学の中では東洋音楽を教えられる場がなく、西洋の美学や、ドイツ語の先生をしておられました。

西島 本当の一流になれば、東も西も関係ないんです。自然科学でもそうなんです。自然哲学を持った時に初めて、自然科学になりうる。自然科学の出身や言うたら、血も涙もない怪物のように見られるんですが、そんなことはない。芸術においても同じで、技能は身に付けていても、情熱をもっていないと本物になれない。芸術大学で「芸術家」ということを限定してしまうことは良くないことではないだろうと思うんですよ。芸術家というのは文化系でも理科系でもないんですよ。

芸術家としての、あるいは学者や研究者としての目的と、国や社会や公の期待

するものとのギャップはあって当然なんですよ。その時に気をつけないといかんのはインディヴィデュアル Individualの内面を掘り下げる情熱。これがなければ成果が上がらない。時には、というか、その方が多いんですが、体制の枠からはみ出してしまうので、反対しているように見えてしまうんですよ。

廣瀬 ところで、昨今の国立・公立大学は、その地域の文化や産業を振興させることだけを考えれば良い、というレヴェルの話もあります。

西島 それやったら大学って名前を付けた方がええんや。結果としてそうなるのならともかく、初めから「役に立つ研究」として行った場合は、目先の利益のために効果が小さい。逆に小さいことだと思われることが大きな事になることの方がはるかに多い。例えば、南極探検の際、お湯さえ注げばできあがる携帯食として開発されたはずのカップヌードルが、世界中の文化を変えてしまった。カラオケも世界中どこへ行ってもあるようになってしまったように、目的と結果ということでの貢献や寄与だけでは、学問というものには、生まれもせねば育ちもしないと思うんですよ。

日本伝統音楽研究センターが、単に京都芸大に一番最初に生まれた研究所ということと、今の音楽教育の中で「日本伝統音楽」を捉えた、ということだけで注目されているのではなく、芸術の高等教育に対する問題提起をやってるんじゃないか、とも思うので、こんなことを僕が言うのは不謹慎かもしれないですけど、全てが学内で円満に解決するはずがないと思っています。短期間ではなく、長期的な視点で、結果がランダムなブラウン運動で染み込んでいく方向性を見定める必要があるでしょうね。大学の中の研究所のあり方には、研究者自身の研究テーマも変わっていった固定した性格は無いんですが、研究者が最高のレヴェルで議論する場という意味での研究所と、それ

に深みと幅を与えるという意味での役割を考えると、大学院博士課程での師弟の関係というのが組み込まれていくと思うのです。師弟の関係を如何に持って行くかは、長い目で見なければならぬでしょうし、ある意味で、そう努めないといかんでしょな。

廣瀬 そうですね。この研究センターも最初は「日本」を取って「伝統音楽研究センター」という名前にしようかと思ったのです。また、京都だけのローカルな伝統文化ではなく、「京都の地で日本全体の文化を研究する」と。それなら此処で、中途半端に音楽を教えたりするよりは、まずはしっかりとした根本の研究をと考えまして……。それには人がたくさん必要になるのですね（笑）。

西島 人に比例して成果が上がるということは研究の世界ではまず無く、むしろ小人数で最高の人を集めてきちっと決めてしていく方が良いと思いますね。

廣瀬 時々、邦楽を教える所と誤解されていますが、設立の目的は、研究所として研究を行うことでした。

西島 将来は「日本」も消え、「伝統」も消え、日本の京都に「音楽研究センター」というようなものがある、ということが世界中で注目されるようになってほしいと思います。先の方まで見通せるような意欲を持ち続けられるよう運動をしていきましようや。過去は過去で、死なんようにカンフル注射して、未来は未来で先端技術やナノ・テクノロジーなどの訳のわからないものもやっていって。それも文化の首都「京都」というこの場所で。

廣瀬 かつての中央政府の西洋音楽一辺倒の音楽教育政策に対するささやかな抵抗として。

西島 すでに効果がでているんじゃないの？ 今度の初等中等教育の改訂で。

廣瀬 ほんの少しはあるでしょうね。

西島 読み書きそろばんレベルならともかく、今の伝統音楽研究センターレベルになる迄には100年はかかるだろう

ね。明治維新からもそのくらい経っているし。むしろ、国際的な活躍の場で、研究センターが一つ一つ成果を出せば、引っ張り上げる原動力になるでしょう。

廣瀬 日本音楽は世界の宝であり、研究するに値するものである、という認識を作るのが、まず第一歩だと思います。

西島 無形文化遺産を大事にしようではないかという議論は20年位前から、ユネスコで行われていたにも拘わらず、なかなか実行されなかったのは、ヨーロッパの石の文化は有形文化であったがためでしょうね。

◆学長からのメッセージ

廣瀬 それでは、そろそろこの辺りで締めの上をいただけませんか。

西島 今日は、『所報』「第3号」の対談ですが、廣瀬先生がいよいよこれから「日本伝統音楽研究センター」の開所、という時に私が着任しました。時には激しい議論もしました。このごろ、私なりに、日本伝統音楽研究センターの中に秘められている、表には見え無いバックボーンが見えるようになってきたように感じられます。人間の音楽研究センターがずーっと向こうに西国浄土のように見えているようで、足下を見た時は非常に地味な格好ですが、少しずつ進んでいるのがこの3年の軌跡を見ればはっきりとわかりますし、最初の出発の時に関わらせていただいたことは、嬉しいことです。私とて、いつ迄もこの大学におられるわけではありませんが、一番気になる存在として見守らせていただきます。廣瀬先生からいただいたテーマが「大学とは何ぞや」と「教育と研究」ということでしたので、そのお話になりましたが、こういう議論を徹底的にすることが大事だと思います。

廣瀬 本当に今日はありがとうございます。

ハタと手を打つ

久保田 敏子

昨年度の公開講座「楽器と人間」(2002年2月16日)の冒頭の問題提起で、原初の楽器の一例として、人間の身体そのものを楽器とする手拍子、足拍子、あるいは身体を打つことなどを挙げた。後で質問があった。「そんなものが楽器ですか」と。もちろん、musical instruments、音を出す道具、音具の一つと考えられる、と答えたが、それ以来、何気なく「聞いて」いた手拍子や足拍子を、「聴く」ようになった。

まず、両手を打ち合わせることは意外に難しいことだと知った。猿の調教師が言っていた。拍手は人間だけで、猿には時間をかけて教え込まねばならない「芸」なのだ、と。

文楽人形の入門者向け解説で、観客によく見せる「技」がある。それは人形が手を打つ場面である。人形の首(かしら)、胴、右手を遣う「主遣い」と、人形の左手を人形遣いの右手で遣う「左遣い」の息がピッタリと合っていないと、人形が「ハタと手を打つ」ことができず、左手と右手がすれ違ってしまふ例を見せるのだ。客席は笑いで溢れる。ふだん、文楽で何気なく見ている人形の動作でも、そうした失敗例を見せることによって、「なるほど」と納得させる。そういえば、ようやくお座りのできるようになった赤ちゃんが、手を打つ動作を真似しようとしても、最初は掌がすれ違ってうまく合わないことに気付いた。少し慣れてきて、連続して両手を打つことができるようになって、暫くは丁度、おもちゃ屋の店先でシンバルを打ち鳴らしているゼンマイ仕掛けのおもちゃの猿のように、大変ごちない。「手を打つ」という行動は、学習して修得する「技」なのかもしれない。

民俗学では、手を打つ行為は、その音で神を呼び、悪霊を退散させるのが目的である、と解しているようだ。神前で打つ手拍子は「柏手」という。柏の葉は掌のように大きく、しかも常緑であることから、神への誓いが不変であることを重ねている。

神前で打つ柏手は、拝する神様の違いや、神社の性格によって、たとえば「二拝二柏手一拝」といったような約束事が次第に整えられていった。初詣などで一般によく見受けるのは、二回手を打つ「二柏手」だが、これは、明治4年に発布された「神社祭式」で「二礼二柏手一礼」の参拝様式に統一された名残だという。出雲大社や伊勢神宮などでは、今でも古式の「四柏手」である。聞く所によると、神には「和魂・荒魂・奇魂・幸魂」の四種の魂があって、その各々に一回ずつ柏手を打つと「四柏手」になるそうだ。

こうした「柏手」は、神から、次第に神格化された貴人にも贈られるようになっていったようで、『魏志倭人伝』にも「大人の敬する所を見ればただ手を搏ち以て跪拜」とあるように、既に、卑弥呼の頃には、柏手が敬意の作法や儀礼として行われていたらしい。かつては帝王から下賜品を受けると、拍手で答礼したこともあったようだ。現在に伝わる一番卑近な例には、相撲の土俵入りで横綱が打つ柏手や、祝いの席での「手締め」がある。

こうした祭祀・儀礼の手拍子は、次第に、歓迎の拍手、賞賛の拍手として広く行われるだけではなく、神ならぬ「おカミさん」など人を呼ぶときの暗黙の合図ともなっていく。

仕事柄、よく劇場に行く。上演されるステージの前後だけでなく、演奏中や演技中でも、感動を呼ぶ名演には拍手が沸く。期待に反するヒドイ舞台でも、日本人は一応

の拍手を送る。ところが外国では、遠慮無くブーイングが起こるようだ。実際の場に出くわしたことはないが、テレビでブーイング場面を観たことがある。口でブーブー言うのみならず、床を足で踏み鳴らしていたのに吃驚した。私の中では、集団で足を踏みならす行為は、プラスのイメージだったからだ。確かに、子供が地団駄を踏んで親を困らせている姿はマイナスイメージだが、これは大人への訴え方の一表現である。普段見馴れている能や舞踊の舞台では、足拍子はプラス効果として取り入れられているし、中国大陸から伝来して日本化された「踏歌」は、大地を足で踏み鳴らしながら歌い舞い、農耕神に捧げる芸能として宮中でも行われていたほどである。

ところで、人形が「ハタと手を打つ」場面では、人形の行為であるから、実際には手を打つ音は聞こえない。そういえば、写実的な演劇ではない能や舞踊でも、手を打つ場面でもリアルに音を出さないが、「足拍子」の方は、実際に「トン」と音を出す。これも面白い現象である。もっとも、手を打つ音を出さなくても、心の中には音が聞こえるから不思議である。実際に音を出さない「手を合わせて拝む」行為も、神仏には「拍手」の音が聞こえているに違いない。同様に、芸能評論の常套句ともなっている「万雷の拍手」「鳴りやまぬ拍手」といった表現なども、実際に舞台を観なかった人にまで、これらの文字を見ただけで「万雷の拍手」が聞こえてくる。

報道番組で訪中、訪韓の映像を目にすることが多くなったせいか、最近、面白い拍手に気づいた。要人の歓迎に手拍子が打たれているのだ。それも、リズムに乗せて。しかも、歓迎されている側の客人すらも、同様にそのリズムに応じて手を打っているのだ。そういえば、スポーツの選手団が開閉

式などで入退場する際にも、この手拍子がある。NHKの喉自慢でもやっている。確かにムードを盛り上げる効果はあるようだ。

これらの手拍子には、いわゆる「楽器」としての意識はないが、宴席などで歌に合わせて打つ手拍子となると、もう、立派に楽器の役目を果たしている。面白いのは、常に偶数拍子で、しかも強弱ではなく表間、裏間という日本的拍子感が手拍子にも残っていることだ。過日、敬老の日にある老人施設へ行ったが、「菜の花畑に入り日うすれ」というあの唱歌「朧月夜」で、何の抵抗もなく、二拍子で手拍子が打たれていた。実は歌も終わり近くになって漸くこのことに気がつき、一人で苦笑したのだった。

『所報』のこのコーナーは硬くないエッセイで、ということになっているが、あまり駄文を連ねるのも憚られるので、この辺りで「締め」にして、手締めといこう。とはいっても、これにもいろいろある。「イヨォーッ、チョン」とやる「一本締め」から、三本締め、その他バリエーションもある。手を打つ行為は、祝儀の席を彩るものであるから、江戸では、武士の手打ちをイメージさせる「手打ち」を忌詞として避け、もっぱら「手締め」というが、上方では、そんなことには頓着なしに「手打ち」という。祇園でも「手打ち」だ。大阪でも「手打ち」なのだが、ただ、江戸流の手締めに対抗して、大阪独自の「手打ち」を、特に「大阪締め」と称している。天神祭りでも、この「大阪締め」が活躍する。では、皆さん、お手をどうぞ。

「打ちまーしょ チョンチョン、も一つせー チョンチョン、祝うて三度チョンチョンがチョン！」

(2002年11月5日受、2004年3月11日加筆)

地方に息づく舞楽 —未来にむけての挑戦—

高橋 美都

舞楽が静かなブームから勢いを得て久しい。箏の音色がコマーシャルに流れ、陰陽師の映画がヒットする中で舞楽の稽古に励む人々が急増したという。宮内庁舞楽の公演の申し込み倍率は上昇し、当選してなお開演の何時間も前から並んでよい場所に着席する努力をするときく。春日若宮のおん祭、四天王寺の聖霊会などにおいても荒天の中で、長時間の奉納を熱心に見届けるファン層が確実に厚くなっているのを感じる。

美しい装束や面をつけて優雅にまた激しく舞う「舞楽」は、古典芸能の中でも鮮やかな色彩に彩られた独特のビジュアル訴求力をもっている。異国の趣や歴史の重みなど舞楽そのものに由来するイメージがあり、さらに演じられる場が荘厳な堂塔の中の石舞台や組舞台であったり、芝舞台、鳥居を背負った海辺の舞台など非日常のハレの空間であることも大きい。聴覚と視覚の面で音楽と動きをみると、拍意識の有無、各楽器（打楽器と管楽器）と舞が引っ張り引っ張られるような関係になったり、音だけが進む場面や音もなく舞のみ進む場面もある。ひとつひとつの演目の構成要素も多様なパターンがあり、複雑な味わいが楽しめると思う。さまざまな要素が織り重ねられ綴り合わされている綾錦のような魅力といえるであろう。

ここまでは、過去においてみやこであった場所（たとえば奈良、京都、鎌倉、江戸）、そして現在のみやこである東京の皇居や明治神宮などや、確立した宗教都市空間（たとえば大阪の天王寺、住吉大社、伊勢神宮、熱田神宮、厳島神社、日光山など）におい

て、儀礼などのおりに演じられる「中央の舞楽」を想定して記してきた。「中央」が適切な表現かどうかはさておくとして、演奏にたずさわるのは国家公務員、プロ、セミプロ、アマチュアなどであるが、代々の世襲であったり師弟関係であったり、人的交流も密で、伝承地ごとの味はあっても、音楽や舞踊としてみれば、「同一の伝承」に帰する内容といえる。

一方、全国各地といっても地域として偏りがあり、東北地方では山形県や宮城県、中部地方では新潟県、富山県、静岡県、岐阜県さらに隠岐などにその土地独特の「地方の舞楽」「鄙の舞楽」の分布がみられる。楽や舞を奉仕するのはその土地で生活している地域社会の一員である。家筋が限定されたり長男などが優先されることもあるようだが、地域内で世代をつぐ形で伝承されているので、内容としては「各地の独自性」が色濃く「中央の舞楽との共通性や各地の伝承間の同一性」を探し出すことは難しい。笙、箏、鞆鼓などのいわゆる舞楽にしか使わない舞楽器はほとんど使わず、笛（龍笛を使う場合もあるが、竹笛が多い）と宮太鼓と当り鉦という組み合わせが多い。通説のようになるが、メンテナンスや習得の容易な楽器に代替されたかと考えられる。面装束に「都の舞楽」との共通性も求めるが、デザインとしては強い個性をもっていて、同一性よりは地域の独自性のほうを強く感じさせる例も多い。演目としてもその地独特のものが加わっている。

それでは「そういう独特の内容を舞楽、舞楽とよんでよいのか？」という素朴な疑問が生じることであろう。これについては、（一部「舞楽」として指定された内容で、その呼称の適切さに疑義あるものもあるが）多くの「鄙の舞楽」には、曲名や面装束の特色のような直接的に舞楽の演目を示す要

素以外に、儀礼の中での演目の配列理念、舞台のしつらえや行列の組み方、身体の動き、音楽として旋律に聞き取れる雅楽曲のおもかげなど「舞楽である総合的なアイデンティティー」がはっきり指摘できる。

そうした各地の「鄙の舞楽」の写真展(写真は酒井信好氏提供)を日本伝統音楽研究センター開設年度に新研究棟のお披露目行事として実施した。スチール写真からもその手ごたえは感じとれたのであるが、このほど15年度からの共同研究として、天王寺舞楽と新潟県能生町白山神社の舞楽と静岡県森町の十二段舞楽の三者に伝わる〈太平楽〉の動作の比較をしている。14年度の委託研究として共同研究員の伊野義博氏が能生町と森町の〈太平楽〉の唱歌を少年への舞楽指導の場で詳細に記録した成果を手がかりとして、天王寺を含めた三者それぞれの身体の動きを細かく記録した文字記録を新たに制作された。天王寺楽所と南都楽所で舞楽を伝承している小野真氏と秋田真吾氏の協力を得て客観的検討をしている。動きの要素を演目の構造の大・中・小の三段階ほどのレベルごとに整理して、現地の伝承者と研究者が協力しながら共通要素の抽出を進めているのである。中央の舞楽が地方に伝播したという仮説をいったん保留しているが、次年度までの計画で、共同作業を続け、伝播や伝承についての考証が可能かを見極めたいと思う。

地域に密着し、受け継いだ伝承を正確に伝える上では、保存会組織などが重要な役割を担っている。いわば守りの姿勢が主になるといえる。ただ、共同研究で対象とした地域では守りだけではなく攻めの姿勢も感じられる。文化財少年団とか郷土芸能クラブのような形で学校教育と連携もっている。

さらに「創作舞楽への試み」が成功した

例を最後に挙げておきたい。2003年度は静岡県が国民体育大会開催県であった。その開会式に照準をあてて、森町では隣接する袋井市とともにゴルフ会場を引き受けたことに結びつけて、ゴルフゆかりの打毬楽を新作した。森町には打毬楽という演目は伝わっていなかったため、教育委員会が中心になって、中央の舞楽の資料を取り寄せ、楽については森町の伝承の典型を組み立てる形で、装束も蚊帳を染めて素襖のように仕立てるなど地域婦人会の協力で手作りし、楽と舞の担い手には、森高校と智周高校の郷土芸能クラブがあたった。足掛け3年をかけて練り、内部での披露や手直しを重ねて、中央の舞楽の打毬楽とは別の「遠江打毬楽」を誕生させたのである。おそらく今後のレパートリーとしても定着すると思われる、保存していくという守りから一歩踏み出した、模倣とは趣きのことなる地方が独自に試みた「未来への挑戦」ととらえてみたい。

センターニュース
(2002.01.01 ~ 2003.12.31)

＜人事・採用及び異動発令＞

平成14年3月31日
教授 長廣比登志 (定年退職)
特別研究員 上杉紅童 (任期満了)
特別研究員 尾関義江 (任期満了)
事務長 今井洋 (退職)
担当係長 野村征理代 (転出)

平成14年4月1日
教授 吉川周平 (新規採用)
特別研究員 岡田万里子 (継続採用)
特別研究員 小川佳世子 (新規採用)
特別研究員 中原香苗 (継続採用)
特別研究員 山田智恵子 (新規採用)
特別研究員 和田一久 (継続採用)
司書 井口はる菜 (継続採用)
研究補助員 伊藤志野 (任期更新)
研究補助員 今井敏行 (任期更新)
研究補助員 水落学 (任期更新)
事務長 旭昭治 (転入)
担当係長 青木静夫 (転入)

平成15年3月31日
特別研究員 岡田万里子 (任期満了)
特別研究員 中原香苗 (任期満了)
研究補助員 今井敏行 (任期満了)
研究補助員 水落学 (任期満了)

平成15年4月1日
非常勤講師 (特別研究員) 小川佳世子 (継続採用)
非常勤講師 (特別研究員) 告井幸男 (新規採用)
非常勤講師 (特別研究員) 山田智恵子 (継続採用)
非常勤講師 (特別研究員) 和田一久 (継続採用)
非常勤講師 (情報管理員) 東正子 (新規採用)
司書 井口はる菜 (継続採用)
研究補助員 伊藤志野 (任期更新)
研究補助員 川和田晶子 (新規採用)
研究補助員 光本健吾 (新規採用)

＜客員研究員受入れ＞

平成14年9月1日～平成15年2月28日
客員研究員 Dr. Elizabeth A. OYLER (セントルイス市ワシントン大学 日本文学科助

教授)
受入研究室：ネルソン研究室
テーマ「中世叙述における清和源氏一源平時代の歴史、鎮魂、文化意識の成立」
オイラー氏の来日は、国際交流記金の助成により可能となった。

平成15年8月1日～平成16年7月31日
客員研究員 Dr. Philip FLAVIN (カリフォルニア大学バークレー校 ポストドクター)
受入研究室：ネルソン研究室
テーマ「江戸期の当道に所属する音楽家の身分と、地歌作物における諧謔性との関係についての歴史的・社会的研究」
フレーヴィン氏の来日は、日本学術振興会外国人特別研究員制度により可能となった。

＜大学・センターの一般公開事業＞

◇研究センター平成13年度第2回公開講座
「楽器と人間 その1」
実施日・所：平成14年2月16日(土) 午後6時45分～8時45分 キャンパスプラザ京都 4階第2講義室

内容：

1. 問題提起：「人間にとって楽器とは…」久保田敏子
2. 「楽器のない音楽・楽器の少ない音楽・楽器の豊富な音楽の意義付け—アイヌ音楽を中心とする北方民族音楽の事例より—」谷本一之(北海道立アイヌ民族文化研究センター所長)、廣瀬量平
3. 「楽器はこうして生まれてきた?—演奏をまじえて—」上杉紅童
4. 「博物館での新しい試み」嶋和彦(浜松市楽器博物館主任学芸員)、大槻晴彦(大阪音楽大学付属楽器博物館専任職員)、植山茂(京都文化博物館主任学芸員)、聞き手 高橋美都

◇研究センター平成14年度第1回公開講座
『『平家物語』の中の音楽 その1 琵琶弾きの経正』
実施日・所：平成14年12月7日(土) 午後2時～午後4時 法住寺阿弥陀堂

内容：

1. 講演：「琵琶弾きの経正—『竹生島詣』と『経正都落』—」
2. 実演：第1部「竹生島詣」
第2部「経正都落」

講演・解説：スティーヴン G. ネルソン
演奏：新井泰子（前田流平家詞曲相伝）
公開講座について（チラシより）

平家の貴公子の中に、詩歌管絃を能くした者が多かったことは周知の通りです。清盛の弟、経盛の子息には、琵琶弾きの経正と笛吹きの敦盛がいましたが、『平家物語』を通してその才能が広く知られるようになったものの、音楽の記録などからは平家の人々の業績がほとんど抹消されており、その実像については不明な点が殊の外多いのです。

今回は、琵琶弾きの経正が主人公となるエピソードの語りを中心に据えながら、講演・解説ではさまざまな史料を検討しつつ経正の人物像に迫りたいと思います。経正はいつ生まれたのか、仁和寺の稚児であった幼少時代に誰に琵琶を教わったのか、「青山」という琵琶の名器をなぜ与えられたのか、などなど多くの謎が残されていますが、それらを明らかにすることで平安末期の音楽文化の中で平家の人々が果たした役割の一面に光を当ててみたいと思います。（スティーヴン・G・ネルソン記）

新井泰子 略歴

上野学園大学在学中に平曲と出会い、1992年全200句を橋本敏江氏より習得、1998年館山宣昭氏より相伝を受く。1995年、お茶の水女子大学大学院修士課程修了。修士論文は「津軽藩における平曲の摂取と伝承」。真言宗豊山派寶玉院にて全句を語り通す会を年5回開くほか、演奏や後継者の育成に努める。宗教法人寶玉院附属日本伝統音楽研究所所長。NHK文化センター弘前教室・さいたまアリーナ教室講師。

実施報告

平成14年度第1回公開講座は『平家物語』の中の音楽 その1』と題して、平成14年12月7日（土）に法住寺の阿弥陀堂を会場にお借りして開催しました。

あいにくの雨天にもかかわらず、往復葉書で申し込まれた熱心な方々約90名でお堂が埋まり、静かに講演と平家詞曲の弾き語りに耳を傾けました。通常は閉ざされている後白河法皇像の御厨子も、住職のご厚意で特別に開扉していただき、おごそかに名号の流れる開幕でした。

まずはじめに、日本伝統音楽研究センターのスティーヴン・ネルソン助教授が、一ノ谷で没した平家の公達（きんだち）経正に焦点をあて、「琵琶弾きの経正」と題し

て講演しました。経正の生い立ちや音楽の手ほどきを受けた相手、琵琶の流儀や秘曲、都を離れるにあたって仁和寺の守覚法親王のところに琵琶の名器「青山」を返しに行った背景や人間関係についても、新しい考証内容を加えて解説しました。

次に、前田流平家詞曲を全段伝承している新井泰子氏が、琵琶の名手の経正を描いた「竹生島詣」と「経正都落」の段を、ネルソン助教授がそれぞれの曲目解説や聞き所の説明をした後で演奏しました。配付資料には詞章も記してありましたが、耳から味わう文学と音楽を堪能していただけたかと思います。

講演と演奏が終了した後、法住寺よりぜんざいと煎茶がふるまわれました。美しいお庭を拝見しながら、演奏の余韻をうけて話をする輪があちこちにでき、またの機会を要望する声がありました。

なお、研究センターとしては初の試みでしたが、参加費1500円を納めていただきました。（高橋美都記）

◇研究センター平成14年度公開実践講座
「体験で知る箏・三味線の効果的指導方法」

実施日・所：平成14年12月24日（火）午後1時～午後5時 京都芸術センター講堂・大広間

内容：京都市立学校教職員を含む受講者約40名が2グループに分かれ、箏・三味線の両方を体験（楽器一式貸与）

講師：久保田敏子、麻井紅仁子、尾関義江、井口はる菜

◇平成14年度第2回公開講座「神の顕現―日韓の宗教的儀礼に見られるかたちと意味―」

実施日・所：平成15年1月17日（金）午後7時～午後9時 キャンパスプラザ京都 4階第2講義室

内容：

1. 講演「日本の神楽と女性の神まつりに見られる神の表現」吉川周平
2. 講演「韓国巫俗神の顕現の方式」南聲鎬（ナンソンホ、早稲田大学演劇博物館助手）

＜大学・センターの出版物＞

◇『邦楽歌詞研究Ⅰ 三味線組歌表組』日本伝統音楽資料集成1 2002年3月31日

発行 A4 2段組縦書き 92 pp. 編集代表者:久保田敏子 発行所:京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター (共同研究「邦楽歌詞研究Ⅰ 一地歌・箏曲」の平成13年度までの成果)

◇『京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 概要2002』B4変形観音折 発行:京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター (書式を若干改めて、本報 pp. 41～42に所収)

◇Research Centre for Japanese Traditional Music, Kyoto City University of Arts, 2002 (上記概要の英語版) B4変形観音折 発行:京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター (書式を若干改めて、本報 pp. 43～45に所収)

◇『邦楽歌詞研究Ⅱ 三味線組歌 破手組・裏組』日本伝統音楽資料集成2 2003年3月31日発行 A4 2段組縦書き 124 pp. 編集代表者:久保田敏子 発行所:京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター (共同研究「邦楽歌詞研究Ⅱ 一地歌・箏曲」の平成14年度までの成果)

◇『京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 概要2003』B4変形観音折 発行:京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター (書式を若干改めて、本報 pp. 46～47に所収)

◇Research Centre for Japanese Traditional Music, Kyoto City University of Arts, 2003 (上記概要の英語版) B4変形観音折 発行:京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター (書式を若干改めて、本報 pp. 48～50に所収)

〈プロジェクト研究〉

◇「日本伝統音楽を対象とする音楽図像学の総合研究」(平成13～15年度)

研究代表者: スティーヴン・G・ネルソン 2001年度

顧問: 蒲生郷昭、ティルマン・ゼーバス、福島和夫

プロジェクト研究員: 赤石敦子、秋田真吾、泉 武夫、入江宣子、遠藤 徹、大梶晴彦、岡田万里子、小野 真、加須屋 誠、勝村仁子、久保田敏子、坂本麻実子、嶋 和彦、志村 哲、

関根敏子、田井竜一、高桑いづみ、竹内有一、田島みどり、谷本一之、中溝一恵、野川美穂子、長谷川由美子、樋口 昭、樋口眞規子、富金原 靖、福原敏男、モニカ・ペーテ、宮崎まゆみ、山下裕二、山寺三知、由比邦子

2002年度

顧問: ティルマン・ゼーバス、福島和夫
プロジェクト研究員: 秋田真吾、泉 武夫、入江宣子、遠藤 徹、大梶晴彦、岡田万里子、小川佳世子、小野 真、笠原 潔、加須屋 誠、勝村仁子、蒲生郷昭、吉川周平、久保田敏子、郡司すみ、薦田治子、坂本麻実子、志村 哲、杉崎貴英、田井竜一、高桑いづみ、高橋美都、竹内有一、田島みどり、谷本一之、中溝一恵、中安真理、野川美穂子、長谷川由美子、樋口 昭、樋口眞規子、富金原 靖、福原敏男、モニカ・ペーテ、宮崎まゆみ、山下裕二、山寺三知、由比邦子

2003年度(2003年度は2004年度以降にむけてのワーキング・セッションとする)

顧問: ティルマン・ゼーバス

ワーキング・メンバー: 青木陽子、泉 武夫、遠藤 徹、小川佳世子、勝村仁子、蒲生郷昭、郡司すみ、薦田治子、杉崎貴英、高橋美都、竹内有一、田島みどり、谷本一之、中溝一恵、中安真理、野川美穂子、長谷川由美子、樋口 昭、樋口眞規子、モニカ・ペーテ、山寺三知、由比邦子

プロジェクト研究実施報告

◆2001年度第3回研究集会

会場: ばるるプラザ京都 5階 会議室2 (1日目)、日本伝統音楽研究センター 7階 合同研究室1 (2日目)

2002年2月16日(土)

司会 久保田敏子

挨拶 所長 廣瀬量平

研究代表者 S・G・ネルソン

プレゼンテーション1 蒲生郷昭

「日本の音楽図像学前史」

コメンテーター 樋口 昭 S・G・ネルソン

プレゼンテーション2 長谷川由美子

「錦絵にみる出語り図の変遷」

コメンテーター 竹内有一 岡田万里子
軽食の集い(京都センチュリーホテル)

2002年2月17日(日)

司会 久保田敏子

午前のセッション(プレゼンテーション3・4)

プレゼンテーション3 高桑いづみ
「絵空事の合奏」
プレゼンテーション4 モニカ・ベエテ
「能の図の時代変化—『賀茂』の図を考え
る—」
パネリスト 高桑いづみ モニカ・ベ
エテ 小川佳世子
モデレーター S・G・ネルソン
プレゼンテーション5 山寺三知
「五代王処直墓の散楽図について」
コメンテーター 田島みどり 高橋美都
総括、全体討論、および今後の予定につ
いて
S・G・ネルソン 高橋美都
参加者
16日 顧問1名、研究プロジェクトメン
バー21名、オブザーバー6名、センター
教員5名
17日 顧問1名、研究プロジェクトメン
バー17名、オブザーバー6名、センター
教員5名
◆2002年度第1回研究集会
会場：日本伝統音楽研究センター 7階
合同研究室1
2002年9月22日(土)
司会 久保田敏子
挨拶 所長 廣瀬量平
報告 研究代表者 S・G・ネルソン
「プロジェクト研究2001年度研究集会の
成果と課題」
講演 天野文雄(ゲストスピーカー)
「絵画にみる能楽の歴史—玉手菊洲模写
『能楽図巻』をめぐる—」
懇親会(海の国)
2002年9月23日(日)
司会 久保田敏子
プレゼンテーション1 中安真理
「箏篋と風箏—仏教建築を荘厳する弦鳴
楽器について—」
コメンテーター 秋田真吾 杉崎貴英
田島みどり
プレゼンテーション2 薦田治子
「琵琶法師の図像から考える日本の琵琶楽
の系譜」
コメンテーター 蒲生郷昭 富金原 靖
プレゼンテーション3 岡田万里子
「坪内逍遙の画証研究」
コメンテーター 蒲生郷昭 高橋美都
プレゼンテーション4 中溝一恵
「描かれた木琴」
コメンテーター 長谷川由美子 由比邦

子
総括、全体討論、および今後の予定につ
いて
S・G・ネルソン
参加者
22日 ゲストスピーカー1名、研究プロ
ジェクトメンバー21名、オブザーバー6
名、センター教員3名
23日 研究プロジェクトメンバー20名、オ
ブザーバー3名、センター教員4名
◆2002年度第2回研究集会
会場：日本伝統音楽研究センター 7階
合同研究室1
2003年1月11日(土)
司会 S・G・ネルソン
プレゼンテーション1 野川美穂子
「図像資料に見る三曲合奏」
コメンテーター 久保田敏子
プレゼンテーション2 笠原 潔
「江戸期洋楽図像資料をめぐる諸問題」
コメンテーター 坂本麻実子 竹内有一
2003年1月12日(日)
司会 久保田敏子
午後のセッション(プレゼンテーション3・
4)
プレゼンテーション3 杉崎貴英
「越中五箇山『筑子踊』の再創造をめぐ
って—民俗芸能のイメージ創出と視覚メ
ディア—」
プレゼンテーション4 入江宣子
「近世都市祭礼図から聞こえてくる音—
『川越氷川祭礼絵巻』を中心に—」
パネリスト 杉崎貴英 入江宣子 樋口
昭
モデレーター 高橋美都
午後のセッション
ラウンドテーブル「音楽図像学の方法論
をめぐる」
モデレーター S・G・ネルソン
懇親会 湯どうふ竹むら
2003年1月13日(月、祝日)
司会 久保田敏子
プレゼンテーション5 谷本一之
「図像が呼び寄せる音楽(続き)」
コメンテーター 勝村仁子
プレゼンテーション6 田島みどり
「描かれた謎の奏法—一豎に置いて弾く
ツィター属—」
コメンテーター 山寺三知
「最後に」
S・G・ネルソン

参加者

11日 研究プロジェクトメンバー22名、オブザーバー5名、センター教員3名

12日 研究プロジェクトメンバー24名、オブザーバー5名、センター教員3名

13日 研究プロジェクトメンバー24名、オブザーバー5名、センター教員3名

◆2003年度第1回研究集会

会場：日本伝統音楽研究センター 7階
合同研究室1

2003年7月19日（土）

ワーキング・セッション打ち合わせ

司会・モデレーター S・G・ネルソン

参加者

ワーキング・メンバー17名、センター教員3名

*上記のように、2001～2年度の研究集会では、プロジェクト・メンバーによる意欲的な研究発表が中心に行なわれ、コメントーターの存在が有効に機能し、時として参加者が思わず興奮するような大きな成果を得ることもあった。2003年度は、将来開催予定の国際会議の準備のために東アジア圏から研究者を2～3名招いて研究集会を開く計画を立てたが、残念ながらこれは予算の関係で実現できなかった。そのため、2003年度のプロジェク研究を、「ワーキング・セッション」として、メンバー有志による実務作業の年にする事とした。

すでに1980年代に、国立音楽大学音楽研究所の「音楽図像学研究部門」より、日本美術に表現された音楽場面について、2点の基礎資料が公開された。すなわち、『日本美術に表現された音楽場面—平安時代から江戸時代までの絵画にみられる楽器目録—』（1984年3月）および『日本美術に表現された音楽場面—平安時代から江戸時代までの絵画にみられる楽器の描き起こし図録—』（1988年3月）であるが、これらを活用して、データベースの基礎データとし、その電子データ化については、これらの目録の拠り所となった基本カードを現在所蔵している国立音楽大学楽器学資料館に委託し、かつ一方では個別のデータの見直しを、各時代の専門家であるプロジェクト・メンバー有志の協力で行なう、という計画に切り替えた。

こうした方針にそって、2003年7月に研究集会を開き、「美術データ班」「楽器・文献データ班」（時代別）などを決定したが、

研究代表者ネルソンが、カリフォルニア大学バークレー校へ客員助教として赴任することになり、実務セッションが延期となった。さらに2004年4月からはネルソンが研究センターを転出することになり、現在のところ、研究センターでの実務作業の今後の行方は不透明になっている。

なお、音楽図像学プロジェクト研究のこれまでの研究成果の公表に関して、2つの大きな動きがあるので以下に報告する。まず第一に、2004年1月に開催される国際伝統音楽学会（ICTM）の国際大会で、「日本における音楽図像学の動向」と題するセッションが開かれ、プロジェクト・メンバーの中安真理・山寺三知両氏およびネルソンによる研究発表が予定されている。第二に、国際音楽図像学誌 *Imago Musicae* の次号を、日本・東アジア特集号とし、ネルソンがティルマン・ゼーバス氏の共編者としてプロジェクト・メンバーの論文を7篇取りまとめることになっている。著者は次の通り（敬称略）：蒲生郷昭、高桑いづみ、中安真理、モニカ・ベエテ、山寺三知、由比邦子、ネルソン。*Imago Musicae*には英文で掲載するが、図表抜きの和文原稿を、別途何らかの形で発行し、図像学に関心のある日本人研究者に広く供したいと思っている。（スティューヴン・G・ネルソン記）

◆「楽器の復元に関する総合研究」（平成12年度）補足研究会

*2002年03月28～30日 日本伝統音楽研究センター

秋田真吾 「春日若宮神社笙の簧に関する成分分析」（付：「春日大社の正遷宮関連行事について」）

高橋美都 「日本伝統音楽研究センターの収蔵楽器の現状と収蔵品管理システムの導入に関して」

岡田万里子 「博物館収蔵品としての楽器ならびに修復あるいは復元に関して」

大梶晴彦 「大阪音楽大学付属楽器博物館所蔵資料の保全について」

小野 真 「雅楽会の組織と楽器管理について」

竹内有一 「三味線をめぐる復元・管理・保存」

（楽器庫の見学とアドバイス）

富金原 靖 「国立劇場が関与した復元事例を中心とする楽器復元の基礎作業について」

嶋和彦 「浜松市楽器博物館の施設運営・
楽器管理・復元事例について」

◇「民俗芸能における神楽の諸相」(平成15
年度)

研究代表者：吉川周平

プロジェクト研究員：植木行宣、片岡康子、
小島美子、星野 紘、松永 建、松原武美、三
村泰臣、宮田繁幸、茂木 栄、和田 修、渡辺
伸夫

*平成15年度第1回研究会

2003年7月26日(土)、27日(日)

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究セン
ター 合同研究室1

開会挨拶：廣瀬量平

研究発表：

1. 吉川周平「神楽研究の諸問題 一南九
州本土の神楽と離島における女性の神ま
つりー」、2. 松原武美「鹿児島県の神楽(神
舞)概観 その1(本土篇)」、3. 松原武美
「鹿児島県の神楽(神舞)概観 その2(離島
篇)」、4. 松永 建「宮崎県の神楽」、5. 松
永 建「宮崎・鹿児島両県以外の九州の神
楽」

司会・進行：吉川周平

〈共同研究〉

◇「邦楽歌詞研究II・III 一地歌・箏曲一」(平
成14・15年度)

研究代表者：久保田敏子

共同研究員：井口はる菜、小野恭靖、佐々
木聖佳、鈴木由喜子、永池健二、西川 学、野
川美穂子、真鍋昌弘、山根睦宏。

*文学と深い関係を持つ邦楽の歌詞の研究
を、音楽学と歌謡学の両面から研究する
べく立ち上げたこの共同研究ではまず、「地
歌」の原点ともいべき「三味線組歌」か
ら開始した。

平成13年度には「表組」の研究を『資料
集成1』として出版。平成14年度には「派
手組」と「裏組」の成果を『資料集成2』
として出版し、本年度は「中組」と「奥組」
をとりあげた。従来通り、各詞章の伝承上
の異動や、関連歌謡、語釈などに細かく当
たり、考察を加えて発表し合い、問題点を
指摘し合って、議論を交わし、研究を深め
ていった。その成果は『資料集成3』とし
て年度末には出版できる予定である。これ
で、地歌の原点ともいべき三味線組歌全
32曲全ての研究が、一応完結することになる。
随所に散りばめられた当時の流行歌からは、

生き生きとした民衆の息吹も感じられ、こ
の研究成果が、現在、心許ない状態にある
三味線組歌の伝承に刺激を与え、再認識さ
れることに一石を投じるに違いないと、期
待している。(久保田敏子記)

◇「山車囃子の諸相」(平成12年度)・「ダ
シの祭り」と囃子の諸相」(平成13・14年度)
研究代表者：田井竜一

共同研究員：青盛 透(京都学園大学助教授、
日本中世史)、入江宣子(仁愛女子短期大学
非常勤講師、民俗音楽学)、岩井正浩(神戸
大学教授、音楽学)、植木行宣(京都学園大
学教授、日本芸能文化史)、垣東敏博(福井
県立若狭歴史民俗資料館学芸員、民俗学)、
吉川周平(センター教授、日本民俗音楽・舞
踊学、平成14年度より)、永原恵三(お茶
の水女子大学助教授、音楽学、平成14年度
より)、樋口 昭(埼玉大学教授、日本音楽
史)、福原敏男(日本女子大学助教授、歴史
民俗学)、増田 雄(水口町役場総務課自治
史編纂調査員、歴史学)、米田 実(水口町役
場総務課自治体史編纂準備室長、民俗学)

所報第2号の刊行以降に実施した共同研
究会は、以下の通りである(場所はいずれ
も、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究セ
ンター合同研究室2)。

*2002年度第1回研究会 2002年6月29
日(土) (1) 樋口 昭「VTRで見る城端の
曳山祭り」、(2) 鬼頭秀明(中京大学非常
勤講師、民俗芸能史、ゲストスピーカー)
「尾張の山車祭りの諸相」、(3) 総合討論

*2002年度第2回研究会 2002年7月7日
(日) (1) テーマ：佐原山車祭りの諸相、
福原敏男「佐原山車祭りの成立と展開 一
江戸時代を中心に」、入江宣子「佐原囃
子」、(2) 福原敏男「祭礼凶三題 一祭礼凶
に見る祭礼囃子」、(3) 総合討論

*2002年度第3回研究会 2002年11月30
日(土) テーマ：東北のダシの祭りと囃
子の諸相、(1) 植木行宣「作り山の展開と
八戸三社祭」、(2) 永原恵三「鹿角市の花
輪ばやしについて」、(3) 総合討論

*2002年度第4回研究会 2002年12月15
日(日) テーマ：四国のダシの祭りと囃
子の諸相、(1) 樋口 昭「桃源郷の祇園祭」、
(2) 岩井正浩「徳島県海部郡の祭り 一穴
喰町と海部町の山車について」、(3) 総
合討論 (田井竜一記)

◇「琴・箏の系譜 一楽器、文献と奏法一」
(平成13～15年度)

研究代表者：スティーヴン・G・ネルソン
共同研究員：青木洋志（上野学園日本音楽
資料室研究員、平成14年度まで）、磯水絵
（二松学舎大学教授）、遠藤徹（東京学芸大
学専任講師→同助教授）、高橋美都（京都市
立芸術大学日本伝統音楽研究センター助教
授、平成14年度のみ）、田中幸江（上野学
園日本音楽資料室研究員、平成15年度よ
り）、告井幸男（京都大学研修員→日本伝
統音楽研究センター特別研究員）、和田一
久（日本伝統音楽研究センター特別研究員）

2001年に引き続いて『日本三代実録』の
音楽関係記事の輪読を行なったが、下記の
通り、場合によって個人の研究発表も加
わった。2002年8月25日に輪読が終了し、
その後、『日本三代実録音楽年表』の発行を
目指して、年表の見直し作業および、奏楽
に関わった機関の任官表や年中行事などの
用語解説の執筆・検討を中心に研究会を重
ねた。なお、研究会でいつも活躍していた
青木洋志氏は、2003年2月の研究会を病欠
した直後、急逝された。私共同研究員は大
きなショックを受けたが、音楽年表を作り
上げて亡き青木氏の霊前に捧げることが、
研究仲間として私たちにできる最大の供養
であると考え、出版を最大の目標として研
究会を続けた。この間、上野学園日本音楽
資料室の研究員として青木氏の同僚であっ
た田中幸江氏が急遽共同研究員に加わって
下さり、窮地を脱することができた。

その後、年表索引の作成に関して、研究
センター研究補助員の川和田晶子さんと光
木健吾さんの手を煩わせることとなった。
年表の編集作業のすべてにわたって尽力い
ただいた和田研究員と、最終的な編集時期
になって日本を留守にすることになったネ
ルソンに代わって、印刷業者との受け渡し
作業を引き受けて下さった同僚高橋美都氏
の努力の賜物として、年度内にセンター資
料集成4として『日本三代実録音楽年表』が
発行される予定となっている。これを青木
氏の霊前に捧げ、心からご冥福を祈りたい
と念じている次第である。

◆個人の研究発表

「和邇部大田麿小伝」(告井)

「多氏について(多自然麿、神八井耳命、
武諸木、飲鹿、多朝臣入鹿、多藤野麻
呂、多臣品治、太朝臣安麻呂、多春野、
多右野)」(青木)

「宮内庁書陵部の新出史料に関する報告」
(遠藤)

「阿部三寅」(青木)

◆研究会

2001年度

*第6回研究会 2002年1月12日(土)～
13日(日)

*第7回研究会 2002年3月2日(土)～
3日(日)

*第8回研究会 2001年3月16日(日)～
17日(月)

2002年度

*第1回研究会 2002年4月27日(土)

*第2回研究会 2002年8月24日(土)～
25日(日)

*第3回研究会 2002年11月16日(土)
～17日(日)

*第4回研究会 2002年12月21日(土)
～23日(月)

*第5回研究会 2002年1月25日(土)～
26日(日)

*第6回研究会 2002年2月22日(土)～
23日(日)

*第7回研究会 2002年3月2日(土)～
3日(日)

*第8回研究会 2002年3月29日(土)～
30日(日)

2003年度

*第1回研究会 2003年4月19日(土)～
20日(日)

*第2回研究会 2003年6月14日(土)～
15日(日)

*第3回研究会 2003年7月30日(水)～
31日(木)

研究会は、大学の登校禁止日に重なったた
めキャンパスプラザ京都で行なった2002
年度第7回研究会を除いて、京都市立芸術
大学日本伝統音楽研究センターで行なった。
(スティーヴン・G・ネルソン記)

◇「寺社の祭祀に関わる舞楽の伝承研究」
(平成15年度)

研究代表者：高橋美都

共同研究員：秋田真吾（春日大社宝物館学
芸員）、伊野義博（新潟大学教育人間科学部
教授）、小野真（天王寺楽所雅楽会理事、同
雅楽練習所講師）、酒井信好（舞楽写真家、
映像を主とする芸能記録作成）

全国各地に伝承されている舞楽について、
儀礼、音楽、舞踊などの実態を比較総合研
究して歴史的考証につなげる構想は研究代
表者個人ではとても実現できないテーマで

あり、共同研究のスタイルにふさわしい内容であると思う。日本伝統音楽研究センターを拠点として、各地で実際に伝承を支える方々や各方面から関心を寄せる研究者の協力を得て、研究の基礎にする映像や文書の記録を体系的に収集蓄積して活用していく方向性を設定している。平成12年度委託研究として共同研究員の酒井信好が「舞楽関係映像の記録作成」と題して、地方舞楽の写真による詳細な記録を準備し、平成14年度の委託研究としては、伊野義博が「地方舞楽における唱歌（しょうが）と身体表現に関する研究」と題して、新潟県能生町白山神社の舞楽と静岡県森町小國神社十二段舞楽の太平楽について詳細な映像記録と伝承に大きな役割を果たす唱歌の分析をした。それらの成果に基づき、春日大社と天王寺で舞楽伝承を支える秋田真吾、小野真の両研究員に加わってもらい、平成15年度より予備的実施の形で共同研究が開始できた。

* 第1回 2003年5月27日(火) 伊野研究員が14年度委託研究内容について伝統音楽研究センターの発表会で報告した機会を共同研究会の出発点とし、実施方針、対象などを設定した。具体的には、四天王寺舞楽と新潟県能生町白山神社の舞楽と静岡県森町小國神社十二段舞楽の「太平楽」の身体動作の比較に焦点をあてることにした。

* 第2回 2003年7月22日(火) 伊野の委託研究添付ビデオと酒井、高橋が撮影していた上記三箇所の太平楽全曲のビデオを全員が事前に分析してきて、比較しポイントを指摘しながら、総覧した。3レベルの構成段落を設定し、記述の用語などを検討した。

* 第3回 2003年11月25日(火) 伊野・小野作成の身体動作の文字記録をもとに、楽章ごとの映像との突合せ確認を進めた(太平楽、道行と破の途中まで)

* 第4回 2003年12月22日(火) 伊野・小野作成の身体動作の文字記録をもとに、楽章ごとの映像との突合せ確認を進めた(太平楽、破の途中から急の途中まで)。年度内に実施する能生町と森町の伝承者からの太平楽に関する聞き取り計画について、および次年度計画について相談した。

実施場所はすべて、日本伝統音楽研究センター合同研究室2。(高橋美都記)

＜特別研究員研究報告＞

◇岡田万里子 「江戸時代後期の上方面における歌舞伎音楽の研究」(平成14年度)

東京都港区立港郷土資料館寄託矢崎俊三氏旧蔵資料に含まれる近世・近代の流行歌関係資料の調査を行った。本資料には江戸時代後期の歌舞伎音楽の資料も含まれており、上方からの流行唄も含まれている。これらの資料をめぐって旧蔵者である港区でクリーニング店を営んでいた矢崎俊三氏という市井の一個人の江戸時代へのまなごしを考察した。本業の洗濯・染色業が近代工業化により飛躍的な進歩を遂げる傍ら、邦楽・日本舞踊を愛好し、晩年には自身の蔵書を用いた江戸文化勉強会まで開催した矢崎氏の江戸趣味は、1980年頃からの江戸学の隆盛に重ねることができた。

また、祇園に伝承される京舞井上流を検証する過程で、井上流の舞を舞い、音楽を担った芸妓という存在自体を検証した。芸妓の担った音楽は上方の歌舞伎音楽の影響を多く受けており、男性によって担われた歌舞伎音楽の女性芸能化という面でも注目すべきものである。芸妓の研究は近年もっぱらアメリカ人によっており、宴会に従事する面ばかりがことさらに強調され、芸術的側面はかえりみられることがなかったため、新たな視座を提供できたと考える。

研究テーマに関連する論文

“Prolegomenon to Geisha as a Cultural Performer: Miyako Odori, The Gion School and Representation of a ‘Traditional’ Japan” 『2002年度演劇博物館21世紀COE紀要』、2003年3月31日／「芸者研究事始一都をどり、祇園女紅場学園、古き良き日本の演じ手」『2002年度演劇博物館21世紀COE紀要』、2003年3月31日／「江戸を生きる」『港区立港郷土資料館研究紀要』2003年3月16日／「川崎九淵筆演能控『甲小習、大習控』の紹介」『早稲田大学演劇博物館学術フロンティア推進事業研究報告書』2003年3月31日。共著者：演劇博物館プロジェクト研究囃子研究会(書誌を担当)

研究テーマに関連する口頭発表

「身体技法と映像記録の可能性 一戦前の都をどりの映像を例に一」日本民俗学会第54回年会ミニ・シンポジウム4「身体技法と映像記録の可能性」、つくば国際会議場、2002年10月6日／「坪内逍遙の画証研究」京都市立芸術大学日本伝統

音楽研究センター研究プロジェクト「日本伝統音楽を対象とする音楽図像学の総合研究」研究集会、京都市立芸術大学、2002年9月23日／「江戸時代後期の上方歌舞伎音楽」京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター特別研究員委託研究員研究発表会、京都市立芸術大学、2002年4月16日

研究テーマに関連する講演

「矢崎俊三氏と邦楽関係資料」港区郷土資料館研究発表会、港区赤坂区民センター、2003年3月16日／Geisha as Cultural Performer: Crafting a Professional Identity 2003年3月5日、於アイオワ大学 (University of Iowa)／Prolegomenon to Geisha as a Cultural Performer: Miyako Odori, The Gion School and Representation of a 'Traditional' Japan 2003年2月24日、於コーネル大学 (Cornell University)／「京舞井上流について」舞台芸術・芸能一発見ライブ in ORBIS、富山県民小劇場、2003年1月18日／「京舞井上流と祇園」ITC 新年会、京都タワーホテル、2003年1月9日／「京舞井上流の成立」京都市主催伝統芸能公演、京都芸術センター、2002年4月6日

◇小川佳世子 「世阿弥晩年期の能についての研究」(平成14年度)

世阿弥晩年期の制作とされる〈班女〉〈井筒〉〈祐〉などの傑作に通底する傾向について発想や表現が能と重なる連歌や、世阿弥がそれらの作品と同時期に著した音曲論などとの関連で考察している。〈班女〉〈井筒〉に関して同時代の文芸や美意識との関わりに関連して詞章をくわしく検討した。〈井筒〉に関しては「〈井筒〉に関する一考察 ― 傾く月の謎―」国際日本文化研究センター共同研究会「生きている劇としての能」報告論文集へ投稿中である。また、応永後期のまとまった連歌作品の記録である「看聞日記紙背連歌」を読み、世阿弥作の能と共通する表現を抜き出し、その類似のレベルごとに考察を試み、「世阿弥晩年期の能の表現と『看聞日記紙背連歌』」としてまとめようとしている。これらの過程で世阿弥晩年期の重要な美意識であり、後の時代にも受け継がれる「冷え」という概念が、世阿弥の音曲論と関係が深いことも明らかになってきた。引き続き「冷え」について世阿弥の音曲感との関係も含めて考察して行きた

い。

研究テーマに関連する論文

「世阿弥と梵灯庵試論 ―『梵灯庵主返答書』を中心に―」(『日本研究』第26集、角川書店、平成14年4月)

研究テーマに関連する口頭発表

平成14年12月26日「世阿弥後期の表現に関する一考察 ―『杉の窓』をめぐる―」六麓会、神戸市立勤労会館

研究テーマに関連するエッセイ

「居グセの楽しみ」(『月刊能』京都観世会館、平成14年10月号)

プロジェクト研究「日本伝統音楽を対象とする音楽図像学の総合研究」に関わり、講演の依頼、班員への連絡、研究発表題目、要旨の取りまとめなどの活動をおこなった。

◇中原香苗 「中世楽書と音楽説話の伝承に関する研究」(平成14年度)

中世南都における音楽伝承の継承と楽書生成の実態を中心に考察した。具体的には、南都興福寺に属する楽人狛氏の嫡流を継ぎ、『教訓抄』を著したことで著名な狛近真周辺の楽書を探ることでその一端を明らかにした。

近真は、『教訓抄』の他に狛氏伝来の舞楽の最秘曲「陵王」の楽譜〔陵王舞譜〕を書いている。奥書によるとこの譜は、「建暦2年(1212)」に書写されたものである。「陵王」は、左方唐楽に属する舞で、現在「荒序」や「唄序」などの舞の伝承が失われているが、この譜には「荒序」や「唄序」を含んだ「陵王」の舞が全曲を通して記されているので、これによれば、舞楽「陵王」の全曲にわたる復元が可能となる。その点からいえば、この譜は、日本音楽史上、大きな価値をもつといえる。

この譜には、各種の裏書が存在する。裏書には演奏上の口伝や故実などとともに「陵王」の所作の一つで秘伝とされた「荒序」の演奏記録や、陵王にまつわる説話なども記されている。例えば、笛の名手であり蜂の大臣とよばれた藤原宗輔が、内裏よりの帰途、「陵王」を演奏していたところ、近くの社から三尺ばかりの人が出てきて、陵王を舞うのに遭遇した、という説話などがある。

裏書をも含めたこの譜の記述が『教訓抄』に受け継がれていることは、拙稿「宮内庁書陵部蔵『陵王荒序』考―『教訓抄』との関連について―」(池上洵一編『論集 説話

と説話集』(和泉書院、2001年)において指摘したが、これが近真の次代の楽書へも影響を与えているのである。なお、前稿の段階ではこの譜を『陵王荒序』と称したが、譜の内容は、「荒序」のみでなく、「陵王」全曲にわたるものであるので、「陵王舞譜」と呼称すべきと考え、今回変更している。

近真の次代の楽書としては、近真の孫朝葛による『統教訓抄』などがあるが、この譜の内容は、『舞楽手記』『舞楽古記』と『竹僂眼集』に継承されていることが確認できる。

『舞楽手記』『舞楽古記』は、春日大社に蔵される春日楽書に含まれる鎌倉時代成立の楽書である。『舞楽手記』は、近真の子春福丸へと伝授された「陵王」の舞譜であり、『舞楽古記』は、近真の二代後の人物までの「荒序」所作記録を中心にした楽書である。

「荒序」を除いた舞の譜の部分が『舞楽手記』に、裏書の大部分が『舞楽古記』に受け継がれている。つまり、譜の表の部分と裏の部分が再編成されて別々の楽書に取り入れられ、新たな楽書が生まれているといえる。

『竹僂眼集』は、貞和3年(1347)以降に成立したかと思われる楽書であり、「狛氏嫡々」として近真の五代後の人物の名前が見えており、狛氏嫡流の人物によって作られたと推測される。この楽書には、舞楽曲についての種々の口伝と舞の譜、そのほか笛の譜、大鼓・鞆鼓など打物に関すること、狛氏に伝わる種々の秘説などが記されている。

この楽書に記される「陵王荒序」「轉」「陵王轉詠」「髭採手」「勅禄手」「噴序」「入綾手」などの譜が、「陵王舞譜」とほぼ重なっている。これら秘説に属する舞が〔陵王舞譜〕によって近真の次の代の楽書へと受け継がれているといえる。

また、『竹僂眼集』には、「近真譜」「近真書」「近真秘書」「近真問答抄」などという記述が散見する。これらは、現在はその存在が知られない近真の著作があったことを示唆するものといえよう。

◇山田智恵子 「義太夫節地合の音楽学的研究—地合において規範となるもの—」(平成14年度)

義太夫節の旋律部分である地合の声のパートにおいて、曲や演奏者による変形を越えた規範は、演奏者にどのように認識さ

れているか、また何がそうした規範となるかを論じた。

まず、規範となる理論的枠組みを演奏者の言説から抽出した。演奏者は義太夫節習得の初期の段階で、「義太夫節とはこういうもの」という同一性認識を獲得する。そのなかで、注目すべきは、「いろんな曲のどこかに同じ節や地合がでてくる」という類型性の認識である。その認識の基準として、(1)旋律型、(2)三味線、(3)詞章という三つの要素があると考えられる。この三つの要素は互いに関係しながら類型性の規範となっているが、特に(3)詞章や語義による類型が重要だと考えられる。それは、(1)の旋律型以外の部分(地合の大部分は非旋律型部分であり、筆者はこれを常の地と名付けた)や(2)の三味線の手によって規定されない部分においても(3)の詞章による類型は見られるからである。そうした詞章や語義における類型が旋律においても規範となり、旋律も同じ形になることを具体的に指摘した。

義太夫節は、演奏者の個性や曲の属性により多様な変形を含みつつも、常の地においては詞章・語義の類型に基づくゆるやかな規範が存在すると考える。

研究テーマに関連する論文

2002.10.31 「義太夫節の音楽構造と文字テキスト」時田アリソン・薦田治子(編)『日本の語り物—口頭性・構造・意義—』(日文研叢書26、国際日本文化研究センター共同研究報告)、京都:国際日本文化研究センター、195-211.

2002.09 学位請求論文「義太夫節の語りにおける規範と変形—地合の音楽学的研究—」(2003.03.31、大阪大学より文学博士号取得)

◇和田一久 「筑紫箏の調絃法について」(平成14年度)

筑紫の基本調絃法は雅楽の下壹越調を踏襲したものといわれるが、松隅桃仙著『筑紫箏秘録口訣』では宮音が第七絃であると主張されている。しかし、筑紫箏最後の伝承者である井上ミナ、村井礼らの演奏は宮音が第五絃であることをうかがわせる。戦後の研究者たちは宮音について言及していない。歌謡の音高を記載した楽譜が存在しないので直接の証左とは言えないが、筑紫箏成立以来の秘伝書の内容を経年的に解析すると、当初から宮音が第五絃であった可

性能が極めて高いことを試案としてまとめることができた。

研究テーマに関する業績

著書：編著『京極流三代年譜』、上北野楽堂、平成14年10月19日

研究ノート：「トビノヲゴト考」、「和琴前史」（以上2件は投稿済みで、平成16年3月発行のセンター紀要に掲載予定）

データファイル：平安時代音楽記事編年の「六国史」に続くものとして、西暦1000年までの音楽記事のデータファイルを作成した。「六国史」編と同じくWindowsのWords2000によって作成。日本伝統音楽研究センターに寄託し、広く内外の研究者に供給可能である。

◇小川佳世子 「世阿弥晩年期の美意識と音曲論についての研究」（平成15年度）

平成14年度に引き続き世阿弥晩年期の能について発想や表現が能と重なる連歌や、世阿弥がそれらの作品と同時期に著した音曲論などとの関連を調査し、通低する美意識について考察した。《班女》《井筒》《砧》等に関して「看聞日記紙背連歌」との関係についてまとめ、口頭および論文で発表した。また《班女》《融》に関して同時代の文芸や美意識との関わりに関連し詞章をくわしく研究した。それらの作品に表れる世阿弥晩年期の美意識について、晩年期の作品に言及している能楽論『音曲口伝』『五音』の記述と関連して考察した。そこには「冷え」をはじめとする当時の重要な概念が反映していると考えられる。《融》に関しては、各注釈書によっても、いまだ確実な意味が不明とされている単語に注目し、「応永の詩画軸」における用語と共通する可能性を指摘し、作品全体の美意識と当時のジャンルを越えて好まれた情趣との関連について考察をすすめている。

研究テーマに関連する論文

「世阿弥晩年期の能の表現と応永期の連歌 — 「看聞日記紙背連歌」をめぐって —」（『藝能史研究』第26集、藝能史研究会、平成15年7月）

研究テーマに関連する口頭発表

平成15年4月13日「世阿弥晩年期の能の表現と応永期の連歌 — 看聞日記紙背連歌をめぐって —」 六麓会例会、神戸市立勤労会館

平成15年5月27日「世阿弥晩年期の能の表現について」 日本伝統音楽研究セ

ンター研究発表会、日本伝統音楽研究センター

平成15年12月21日「「しもん」「こしう」は「柴門」「孤舟」か — 《融》の詞章をめぐって —」 六麓会例会、神戸市立勤労会館

共同研究

神戸女子大学伝統芸能研究センター「謡抄守清本の書誌学的研究」に参加。

国際日本文化研究センター共同研究「文化としての植物」に能楽研究の立場から参加。

平成15年12月14日 第1回共同研究会 国際日本文化研究センター

プロジェクト研究「日本伝統音楽を対象とする音楽画像学の総合研究」に関わり音楽場面を持つ室町時代の日本美術について調査。

◇告井幸男 「摂関期における楽人の研究」（平成15年度）

後世に楽家として確立する以外にも、摂関期以前において複数の楽人を輩出した氏族が数多く存在した。中でも大友（伴）氏は相承上において重要な位置を占めると共に、楽家としての多氏成立過程においても見逃せない動きをしている。院政期において多氏父子が山村氏に害され、いったん断絶の危機に至ったことは周知の通りであるが、摂関期においても大友氏が山村氏と類似の行動に走っている。院政期の事件を惹起した原因と事件の結果いずれもが、楽家多氏の確立と深い関係があった如く、摂関期の事件も当該期の多氏の事情及び王権・貴族との関係など、時代のうねりが大きく関わっていた。この事件を考察対象の中心としながら他の諸氏の活動も含めて、古代から中世への転換点としての摂関期における、楽人の諸様相についての研究を進行中である。

研究テーマに関連する口頭発表

2003年5月8日「句と音楽」『吏部王記』研究会 於京都大学西山良平研究室

◇山田智恵子 「義太夫節の近代」（平成15年度）

明治期の文楽は、文楽座の竹本摂津大塚と彦六座を興した二世豊澤團平という名人二人の功績により、18世紀半ばの人形浄瑠璃最盛期に匹敵する黄金期であったと捉えるのが一般的である。しかし、現在の義太

夫節に繋がる音楽的近代化とはどのようなものであったかはいまだに未解明のままである。

今年度は、その大問題にいかにしてアプローチすべきかという方法について考察した。まず、記されたものから何がどの程度わかるかを探るために、浄瑠璃本の調査を行った。その過程において、従来から学術的な演奏家として幕末期や明治期の三味線の朱を収集または記録していると認識されながら、そのコレクションが未整理であった二世鶴澤清八旧蔵浄瑠璃本コレクションの目録を作成した。目録作成において、文学・演劇研究の立場では分類・定義されていなかった三味線朱入りの書き本について、音楽研究の立場から、「三味線譜本」という分類項目を立てることを提唱した。研究テーマに関連する著作

2003.07.20 山田智恵子「目録の概要」:
72-75。井野辺潔(監修)・網干毅・岩堀智美・株本真里(編集)・山田智恵子(学術協力)「二世鶴澤清八浄瑠璃本コレクション目録」塩津洋子(編)『音楽研究 大阪音楽大学音楽博物館年報第19巻』:
71-193。

◇和田久 「平安中期音楽記事編年」の作成(平成15年度)

平安時代音楽記事編年の「六国史」に続くものとして、西暦1010年までの音楽記事のデータファイルを作成した。「六国史」編と同じくWindowsのWords2000によって作成してある。

当初西暦1100年まで調べる予定であったが、目標の十分の一の年数しかすすまなかった。これは、この期にはいって音楽記事が飛躍的に多く、かつ詳細に記述されるようになったためである。

ともかく、三年間の研究活動によって、西暦700年頃から西暦1010年までの古代音楽記事がすべてキーワードによって検索でき、西暦792年以降は年月日検索、この日にどんな音楽記事があったかを参照できるようになった。成果はMOに納めて日本伝統音楽研究センターに寄託し、広く内外の研究者に供給可能である。誰でも自由に入手、参照されたい。

<委託研究>

「地方舞楽における唱歌(しょうが)と身体表現に関する研究」伊野義博(平成14年度)

「中国楽器の演奏場面の図像資料目録作成」田嶋みどり(平成14年度)

「音楽図像目録・描き起こし図録のデータベース化作業」国立音楽大学楽器学資料館(平成15年度)

「東明流に関する資料収集」平岡久治(平成15年度)

<所員の活動>

◇廣瀬 量平

◆著作発表活動

* 2002.02.03 「東からの頌歌、ヴィオラのための」、主催:日口音楽協会、東京、すみだトリフォニーホール

* 2002.03.03 初演「岬のレイクエム、アルトフルートとピアノのための」、演奏:野口龍(フルート)、山上友佳子(ピアノ)、『廣瀬量平の多彩な音楽世界 1』、主催:函館市、北海道新聞、函館、函館芸術ホール

* 2002.03.20 『『渺』、尺八独奏のための』、演奏:中村明一(尺八)、東京、紀尾井ホール

* 2002.06.29 『『みだれ』による変容、二十五絃箏のための』、演奏:野坂恵子(25絃箏)、NHK-FM放送

* 2002.10.06 「海はなかった」「走る海」、演奏:平松混声合唱団、東京、第一生命ホール

* 2002.10.19 「霹、燎、湫、飛、尺八と弦楽器と打楽器のためのコンポジション」、演奏:三橋貴風(尺八)ほか、斉藤一郎(指揮)、『日本の作曲21世紀へのあゆみ concerto 20-21』、紀尾井ホール

* 2002.10.21 「讃歌、フルートソロのための」、オランダ・クリスチナ女王コンクール入賞者によるコンサート、池田市民会館

* 2002.10.26 「アスラ、無伴奏ヴァイオリンのための」、演奏:梅原ひまり(ヴァイオリン)、京都、曼殊院

* 2002.10.27 「オード 1」、「オード 2」、「メディテーション」、「イディール」、「ヒム」ほかりコーダー作品、演奏:レイネ・マリー・フェアファーゲン、吉沢実、山岡重治、海野文葉、『廣瀬量平の音楽を訪ねて—オランダから京都へ To the Hirose's music world』、静岡音楽館

* 2002.11.02 「雪舟讃」、演奏:日本音楽集団、田村拓男(指揮)、第一生命ホール

* 2002.11.15 「額田王による三つの歌」、

- 演奏：友淵のりえ（箏弾き歌い）、東京、ABCホール
- * 2002.11.23 合唱組曲「カムイの森で」、演奏：合唱団高松ミュージックウエイ、香川県県民ホール、アクトホール
 - * 2002.12.06 「恵光」、「ひかり」、「報恩十方」（雑宝蔵経より）、演奏：山本邦山、山本真山（尺八）、岡田知之打楽器合奏団、『第11回世界佛教音楽祭』、東京、築地本願寺本堂
 - * 2002.12.10 初演「浮舟一水激る宇治の川辺に一、二十五絃箏のための」、『『みだれ』による変容、二十五絃箏のための』、演奏：野坂恵子（25絃箏）、第19回野坂恵子リサイタル、東京、津田ホール
 - * 2003.02 アメリカ初演「浮舟一水激る宇治の川辺に一、二十五絃箏のための」、演奏：野坂恵子（25絃箏）、ワシントン、フーリヤ美術館ホール（02.13）、ナッシュビル、ミドルテネシー大学（02.15-16）、カリフォルニア、カリフォルニア大学パークレー校（02.18）
 - * 2003.03.08 新作初演「新大学祝典序曲」（九州大学医学部100周年記念）、演奏：九州大学フィルハーモニー管弦楽団、荒谷俊治（指揮）、九州大学100周年記念ホール
 - * 2003.03.12 「箏独奏のための十段『櫻』」、演奏：白根きぬ子（箏）、『現代箏の音楽の流れ』、すみだトリフォニーホール
 - * 2003.03.28 初演+改訂初演「額田王による前奏曲と三つの歌」、演奏：友淵のりえ（箏ひき歌い）、『萬葉集によせて：大津宮・うた世界』、大津、びわ湖大津館
 - * 2003.04.20 ものづくり大学校歌新作発表披露（詞：梅原猛）、ものづくり大学入学式
 - * 2003.04.05 新作再演「新大学祝典序曲」、日本医学会總會、福岡市サンパレスホール
 - * 2003.04.13 再上演「漢詩による五つの歌」、演奏：浦安男声合唱団
 - * 2003.04.30 「メディテーション」の公開演奏、演奏：カメラータ・モデルナ、ウルリケ・フォルクハルト（ハノーバー大学教授）と廣瀬量平上演のための来日、関西ドイツ文化センター京都
 - * 2003.05.23 (1)「こどものうた」(2)混声合唱組曲「カムイの森で」より3曲(3)啄木による函館のうた「矢車の花」「蟹」初演(4)組曲「五つのアンセム」より2曲、組曲「ヒミコの歌」より2曲(5)組曲「海鳥の詩」全曲、函館芸術ホール主催公演『廣瀬量平をうたう』
 - * 2003.06.20 新作一般公開初演奏「新大学祝典序曲」、福岡市アクロス
 - * 2003.09.27 女声合唱組曲「五つのアンセム」「海鳥の詩」、演奏：コールレオーネ、増井信貴（指揮）
 - * 2003.10.14 「パラミター、アルトフルートのための」、野口龍（フルート）、東京、石橋メモリアルホール
 - * 2003.10.14 「アスラ、ヴァイオリン独奏のための」、演奏：水野佐知香（ヴァイオリン）、東京文化会館小ホール
 - * 2003.10.30 東京初演「額田王による前奏曲と三つの歌」、紀尾井ホール
 - * 2003.11.23 首都圏初演「新大学祝典序曲」、演奏：町田フィルハーモニー管弦楽団、荒谷俊治（指揮）、横浜ミナトミライホール
 - * 2003.12.13 「浮舟一水激る宇治の川辺に一、二十五絃箏のための」、演奏：野坂恵子（25絃箏）、企画・構成・司会：小島美子、主催：日本芸術財団、東京朝日生命ホール
 - * 2003.12.18 「朝のセレナーデ」、演奏：京都市立芸術大学管弦楽団、秋山和慶（指揮）、京都市立芸術大学定期演奏会、京都コンサートホール
- ◆口述活動
- * 2002.03.03 講演「風土と音楽」、『廣瀬量平の多彩な音楽世界 1』、主催：函館市、北海道新聞、函館、函館芸術ホール
 - * 2002.10.26 廣瀬とレイネ・マリー・フェアファーゲンによる対談、『廣瀬量平の音楽を訪ねて—オランダから京都へ To the Hirose's music world』、静岡音楽館
 - * 2002.12.06 講演「東洋と西洋の美」、『第11回世界佛教音楽祭』、東京、築地本願寺本堂
 - * 2003.03.28 講演「大津京をめぐる人々とその背景」、『萬葉集によせて：大津宮・うた世界』、びわ湖大津館
 - * 2003.04.20 研究発表（講演）「萬葉人と音楽—その意識と無意識—」、奈良県立萬葉古代学研究所共同研究
 - * 2003.04.30 ウルリケ・フォルクハルト（ハノーバー大学教授）との公開討論、カメラータ・モデルナ廣瀬作品上演のための来日、関西ドイツ文化センター京都

- * 2003.08.13 講演「今、なぜ伝統音楽か」、主催：文部科学省、国立劇場大劇場
- ◆調査活動
- * 2003.06.07 佐賀県吉野ヶ里遺跡調査
- * 2003.06.07 山口県土井浜遺跡調査、綾羅木遺跡出土の「土笛」等の調査
- * 2003.06.21 大分県豊津市歴史博物館、市立図書館の小宮豊隆文庫にて、東京音楽学校及び東京芸術大学設立時の資料を調査
- * 2003.12.14～15 財団法人民主音楽協会音楽資料館にて、資料調査
- ◆対外活動（作品審査等）
- * 2003.06.23 日本交響楽振興財団募集、管弦楽作品演奏審査、東京フィルハーモニー管弦楽団、東京文化会館大ホール
- * 2003.08.18～30 地方の時代賞映像祭審査、東京国際大学（川越市）、主催：NHK、民放連、川越市
- * 2003.10.13 日本の音楽展、公募作品審査、東京芸術劇場。
- * 2003.12.07 吹田音楽コンクール作曲部門審査、吹田市メシアター
- ◆企画制作・上演活動
- * 2003.09.06 京都芸術センター主催「親と子のコンサート：物語りうた」、プロデュース
- * 2003.10.22 「京都・若い作曲家による連続音楽展29」、プロデュース・司会・解説、主催：京都市音楽文化芸術振興財団、京都コンサートホール

◇吉川 周平

◆著作活動

- * 2003.05.30 論文「日本伝統芸能学の構築のために一身体のウゴキの観察と分析の方法一」、森永道夫編『芸能と信仰の民族芸術』大阪、和泉書院、pp. 29-37
- * 2002.11.23 研究ノート「岩国行波の神舞一式年の神舞と荒玉社の例祭での神舞一」、『民俗芸能』83、pp. 16-35
- * 2002.11.23 研究ノート「坂本念仏踊一讃岐で練り上げられた雨乞いの踊り一」、『民俗芸能』83、pp. 36-43
- * 2002.12.24 報告「栃木県で開かれた第3回民俗音楽研究会『栃木県の事例にみる意義と課題』」、『日本民俗音楽学会会報』18、pp. 3-4
- * 2003.03.31 報告「パネルディスカッション：栃木県の事例にみる意義と課題」（第3回民俗音楽研究会報告『民俗音

- 楽の継承とその現代的展開一栃木県の場合一』2002 栃木）、『民俗音楽研究』28、pp. 107-110
- * 2003.11.22 座談会「本田安次先生と全国民俗芸能大会」、三隅治雄、星野 紘、吉川周平、山路興造（司会）、『民俗芸能』84、pp. 69-76
- ◆口述活動
- * 2002.10.21 研究発表「盆踊りにおける癒しの側面一姫島の盆踊りをめぐって」、日本学術会議第1部文化人類学・民俗学研究連絡委員会主催、芸術学研究連絡委員会後援、舞踊・身体表現研究小委員会シンポジウム『舞踊・身体表現における動物と自然』、東京、日本学術会議2階会議室
- * 2003.03.29 研究発表「舞踊人類学の課題と方法序説一日本の民族舞踊を素材として」、日本スポーツ人類学会第4回大会、シンポジウム『舞踊人類学を考える』、東京、早稲田大学総合学術センター国際会議室
- * 2003.09.27 研究発表「民族舞踊と教育プログラム一民俗芸能と日本の〈体育〉」、日本体育学会スポーツ人類学・専門分科会シンポジウム『民俗舞踊と教育プログラム』、熊本、熊本大学C101教室
- * 2003.12.07 研究発表「盆踊りの場にあふれる性の力」、第55回舞踊学会大会シンポジウム『ダンスと若者文化』、東京、お茶の水女子大学共通講義棟2号館102
- * 2003.07.26 研究報告「神楽研究の諸問題一南九州本土の神楽と離島における女性の神まつり一」、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センタープロジェクト研究『民俗芸能における神楽の諸相』第1回研究集会基調報告、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター合同研究室1
- * 2002.10.17 講演「京（みやこ）の風流、松の祝い」、京都電気倶楽部月例会、京都、京都電気倶楽部会議室（関西電力KK京都支店ビル6階）
- * 2003.01.17 講演「日本の神楽と女性の神まつりに見られる神の表現」、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター平成14年度第2回公開講座『神の顕現一日本韓の宗教的儀礼に見られるかたちと意味一』、京都、キャンパスプラザ京都4階第2講義室
- * 2003.06.19 講演「民俗芸能と舞踊学一伝承されている芸能のかたちをとらえ、

- その意味を考える一」、早稲田大学21世紀COEプログラム『演劇の総合的研究と演劇学の確立』、演劇理論研究・舞踊研究コース、東京、早稲田大学演劇研究センター6号館318号室(演劇博物館レクチャールーム)
- * 2003.06.29 講演「舞踊表現の東西一かぶきの〈オドリ〉を考える一」、日本学術会議芸術学研究会連絡委員会・立命館大学21世紀COEプログラム『京都アート・エンタテインメント創成研究会』シンポジウム『表象芸術2003—アジアの歌と舞い—』、京都、立命館大学以学館2号ホール
 - * 2003.11.15 講演“The Transmission of the Folk Performing Arts in Japanese Regional Communities: The ‘Bon Odori’ (Bon Dance) as a Ritual for the Spiritual Rebirth of the Dead” (「日本の地域社会におけるの民俗芸能による固有文化の本質的な伝承—死者の霊の聖なるものへの再生儀礼としての盆踊りをめぐって—)、『第3回日伊国際シンポジウム』、イタリヤ、アレツォ市、シエナ大学アレツォ・キャンパス、文学部ピエトロ・アレティーノ劇場 (Teatro “Pietro Aretino”, Facolta di Lettere, Arezzo)
 - * 2003.05.24 シンポジウム討論司会『第3回舞踊・身体表現研究小委員会シンポジウム』、第1部「ハレとケの身体表現」、第2部「舞踊研究のプログラムティズム最前線」、合併討論、日本学術会議第1部文化人類学・民俗学研究連絡委員会主催(民俗芸能学会、舞踊学会、比較舞踊学会)、東京、早稲田大学小野記念講堂
 - * 2002.10.26 解説「時空のこえた獅子達の競演」、『さぬきの郷土芸能まつり』第1部(香川芸術フェスティバル2003主催公演)、香川、サンポート高松2万トン埠頭
 - * 2002.11.23 演目解説「香川県綾歌郡飯山町 坂本念仏踊」、『文化庁企画第52回全国民俗芸能大会』、東京、日本青年館
 - * 2002.11.23 演目解説「山口県岩国市行波 岩国行波の神舞」(研究公演の部)、『文化庁企画第52回全国民俗芸能大会』、東京、日本青年館
 - * 2002.11.23 演出・舞台監督『文化庁企画第52回全国民俗芸能大会』、東京、日本青年館(山路興造氏と共同)
 - * 2003.11.22 演出・舞台監督『文化庁企画第53回全国民俗芸能大会』、東京、日本青年館(山路興造氏と共同)
- ◆調査・見学
 - * 2002.06.11 香川県綾歌郡飯山町坂本念仏踊調査。財田町の香川用水水口祭。他に財田町の獅子舞とりょう王太鼓も見る。
 - * 2002.07.16 京都市の祇園祭宵山見学。
 - * 2002.07.17 京都市の祇園祭山鉦巡行見学。
 - * 2002.08.20～09.01 中国の「曲藝(説唱歌謡)」と舞踊の調査。北京市、新疆ウイグル自治区のウルムチ・イーニン・那拉提高原・トゥルファン・カシュガル・アトシユに行き、ウイグル族・カザフ族・回族・モンゴル族などの音楽と舞踊を調査鑑賞。
 - * 2002.09.07～08 山口県岩国市に行き、岩国民俗芸能祭を見、2日に渡って岩国市の民俗芸能の保存会を訪れ、現状を調査。
 - * 2002.10.12 山口県岩国市行波に行く。荒玉社の小祭の神舞を見学。
 - * 2002.10.14 香川県綾歌郡綾歌町のアイレックスに行き、飯山町の坂本念仏踊のリハーサルを見学。
 - * 2003.07.29 香川県三豊郡三野町大見公民館で、同町の人形芝居讃岐源之丞を調査。
 - * 2003.07.30 香川県高松市円座町円座公民館で、同町の人形芝居香翠座を調査。
 - * 2003.08.14 香川県坂出市与島と櫃石島の盆踊りを調査。
 - * 2003.08.15 愛媛県の今治からしまなみ街道の島々の盆踊りを調査。夜、同県越智郡上浦町瀬戸の向雲寺の盆踊りを調査。
 - * 2003.08.16 越智郡大三島町野々江の盆踊りを調査。
 - * 2003.08.17 大三島からしまなみ街道を北上し、諸島の盆踊りを調査。
 - * 2003.09.14 民俗芸能学会に参加し、新潟県柏崎市市民会館大ホールにて、綾子舞・オテテコ舞、静岡県の高ヤイ踊り等を見学。
 - * 2003.09.15 柏崎市の綾子舞会館前にて、綾子舞を見学。
 - * 2003.09.21 香川県高松市香東中学校において、香翠座の『傾城阿波の鳴門』「巡礼歌の段」、『近頃河原達引』「堀川猿回しの段」、『壺坂靈験記』等を見学。

◆在外研修

- * 2003.11.12～18 『第3回日伊国際シンポジウム』に参加。イタリア、シエナ市・アレツォ市のシエナ大学でのシンポジウムに参加し、発表（口述活動の項に題目等を記す）。

◆対外活動

- * 文化審議会専門委員（文化財分科会）
- * 香川県文化財保護審議会委員
- * 香川県立瀬戸内海歴史民俗資料館運営協議会会長
- * 舞踊学会常務理事
- * 日本民俗音楽学会常任理事
- * 民俗芸能学会理事
- * 民族芸術学会理事
- * 日本歌謡学会評議員

◇久保田 敏子

◆著作活動

- * 2002.01.14～06.24 連載「邦楽散歩」／京都新聞朝刊 01.14「万歳から漫才へ」、01.21「八橋検校と箏曲」、01.28「くすががき」と「りんぜつ」、02.04「唯一の弓奏楽器胡弓」、02.11「三味線とサワリ」、02.18「菅原道真没後千百年」、02.25「五人囃子とハヤシ」、03.04「ファッションの旗手歌舞伎」、03.18「大阪パワー義太股引」、03.28「ご当地ソング地歌」、04.01「音曲百科『浮世風呂』」、04.08「太鼓は語る」、04.22「新内流し」、04.29「五線譜の『箏曲集』」、05.13「近代琵琶への道」、05.20「バイオリンの流行」、05.27「明清楽から大正琴へ」、06.10「コマーシャル」、06.17「夏祭り」、06.24「明日に向かって」
- * 2002.01.12 プログラム解説「上方舞」飛鳥峯王上方を舞う／ワッハ上方
- * 2002.01.27 プログラム解説「三曲と三曲合奏について」「寛潤一休」「四季の富士」「鶴の巢籠」「奥州薩慈」「八重衣」「熊野」邦楽鑑賞会三曲／国立劇場
- * 2002.02.05～ 連載「温故知新」『楽報』No. 914「根曳の松1」、No. 916「根曳の松2」、No. 918「宇治巡り1」、No. 920「宇治巡り2」、No. 922「深夜の月」、No. 924「園の秋」
- * 2002.02.25 作詞「飛梅 菅原道真公没後1200年によせて」作曲：四代萩岡松韻
- * 2002.03.01～ 連載『創明』／創明音楽会会報 No. 213「残月」、No. 214「磯

- 千鳥」、No. 215「夜々の星」、No. 216「萩の露」、No. 217「里の暁」
- * 2002.03.31 編集『邦楽歌詞研究 I 三味線組歌 破手組・裏組』日本伝統音楽資料集成第1巻 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター
- * 2002.04.21 プログラム解説「薄雪」「秋風辞」「里の暁」「残月」「袖香炉」第九五回琴友会箏曲地歌演奏会 一菊原初子先生を偲んでー/サンケイホールなにわ芸術祭
- * 2002.05.19 論述「長谷検校についてその1」長谷記念邦楽コンクール本選プログラム
- * 2002.06.22 「さらし風手事」「越天楽奏曲」「尾上の松」「水煙風鐸」宮城道雄をしのぶ箏の夕べ/いずみホール
- * 2002.07.11～13 プログラム解説その1「太鼓は語る」、その2「箏曲って何？」邦楽鑑賞教室「太鼓・箏曲」／国立劇場
- * 2002.08.05 論説「箏ウタとしての道元 禅師詠歌抄」CD「禅の音声 道元の世界」ソネットレコードDOOEM04692／04702
- * 2002.11.04～ 連載「邦楽散歩・うた暦」／京都新聞朝刊 11.4「口切り」、11.18「萩の露」、11.25「紅葉尽くし」、12.2「枯野帖」、12.16「狐火」、12.23「鉢叩き」、12.30「影法師」
- * 2002.12.06 プログラム解説「箏組歌について」「梅が枝」「花の宴」「古流四季源氏」「四季の富士」「飛燕曲」第二回箏曲組歌演奏会／紀尾井ホール
- * 2002.12.20 論説「柿堺香と海童道」解説「虚空」「山越」「産安」「本調」「三谷」「手向」「松巖軒鈴嘉」「心月」第三回ビクター邦楽技能者オーディション合格者CD 柿堺香／ビクター伝統文化振興財団
- * 2002.12.20 解説「懐月調」「峰の月」「越後獅子」「御山獅子」第三回ビクター邦楽技能者オーディション合格者CD 永廣孝山／ビクター伝統文化振興財団
- * 2003.01.06～ 連載「邦楽散歩・うた暦」8～13／京都新聞朝刊 01.06「若菜」、01.13「十日戎」、01.20「松尽くし」、01.27「鶴の声」、02.17「鬼は外へ」、02.21「雪」
- * 2003.02.01 監修と曲目解説「六段の調」（三弦本手・替手）「八段の調」（三弦本手・替手）、「夕べの雲」（「菜露」打合）、「石橋」（三弦・尺八）、「菊の露」（三弦本

- 手・替手)、「残月」(三弦本手・替手)、「若菜」「新浮舟」「竹生鳥」「舟の夢」「新娘道成寺」「茶音頭」「儘の川」「長等の春」「芥子の花」「夜々の星」「三津山」「桜川」「打盤・横槌」(打合)「新撰・藤井久仁江箏曲地歌の世界」COCJ-32046-50 CD アルバム/コロムビア・ミュージック・エンタテインメント
- * 2003.02.05～ 連載「温故知新」『楽報』No. 926「尾上の松1」、No. 928「尾上の松2」、No. 930「西行桜1」、No. 932「西行桜2」、No. 934「磯千鳥」、No. 936「玉の台」
- * 2003.02.09 論文「神楽一神事から下座音楽まで一」『秋篠文化』第一号(秋篠音楽堂運営協議会)
- * 2003.03.15 論文「竹を歌った座敷歌」『竹』第83号(竹文化振興会)
- * 2003.03.22 論文「地歌(こんくわい(狐會))」『朱』第46号(伏見稻荷大社)
- * 2003.03.31 編集『邦楽歌詞研究Ⅱ 三味線組歌 破手組・裏組』日本伝統音楽資料集成第2巻 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター
- * 2003.05.18 論考「長谷校伝その2」長谷校伝記念コンクール・本選プログラム
- * 2003.06.14 プログラム解説「鶴の巣籠」「懐月調」「笹の露」藤田天山尺八リサイタル/京都府民ホールアルティ
- * 2003.06.21 プログラム解説「五段砧」「北国雪賦」「春の夜の風」「大洋の朝」「高麗の春」「祝典箏協奏曲」宮城道雄をしのぶ箏の夕べ ～ひとひらの花～/いづみホール
- * 2003.07.09～11 プログラム解説「雅楽・管楽器」伝統音楽鑑賞教室/国立劇場
- * 2003.08.01 企画構成・配付資料作成「ここが違う関西と関東の三味線音楽」日本の音フェスティバル・大阪国際会議場
- * 2003.09.06 論考「菊武祥庭先生のこと」菊武祥庭五十回忌追善演奏会プログラム/国立音楽劇場
- * 2003.09.07 論考「菊原初子先生のこと」・曲目解説「空蟬」「夕顔」「笹の露」「磯千鳥」「花形見」「摘草」「浪花菊」「新娘道成寺」「古流四季源氏」「新浮舟」「秋の曲」「越後獅子」「吾妻獅子」「残月」「萩の露」「夜々の星」「五段砧」「四季の眺」「こんかい」「小督曲」「珠取海士」「虫の音」「菊の榮」菊原初子三回忌追善箏曲地歌演奏会プログラム/国立音楽劇場
- * 2003.10.06 プログラム解説「中空砧」「新娘道成寺」「なばりの三つ一箏と三弦による」片岡リサ・リサイタル/いづみホール
- * 2003.10.21 プログラム解説「桜狩」「さらし」萩岡松韻りさいたる/国立劇場
- * 2003.10.29 企画とプログラム解説「上方浄瑠璃と創作舞踊」中島勝祐+神崎貴糸+吉村古ゆう他・「鬼は外へ」「城山狸」京都ピエンナーレ/京都芸術センター
- * 2003.10.30～11.01 企画「新内節とパンソリ」金福美+鶴賀若狹独他「春香伝」「十三夜」京都ピエンナーレ/京都芸術センター
- * 2003.11.20 プログラム解説「琉球組」「中空砧」「菊の露」「笹の露」「融」菊信木恵美子・洋子親子ジョイントコンサート/ワッハ上方
- * 2003.12.01 プログラム解説「箏組歌について」「友千鳥」「雲井弄斎」「雪の晨」「新雲井弄斎」「宮の鶯」「春の宮」箏曲組歌演奏会/紀尾井ホール
- * 2003.12.21 プログラム解説「冥途の飛脚」「うちわ売り恋追風」第六回りさいたる「東音中島勝祐作品展」/紀尾井ホール
- * 2003.12.30 曲目解説「ゆき」「新娘道成寺」「末の契」「七小町」第四回ビクター邦楽技能者オーディション合格者CD「市橋京子」VZCG316/ビクター伝統文化財団
- * 2003.12.30 曲目解説「乱」「千鳥曲」(米川敏子替手付)、「砧」(米川琴翁伝承箏手付)、「楓の花」「春の寿」第四回ビクター邦楽技能者オーディション合格者CD「岡崎敏優」VZCG317/ビクター伝統文化財団
- ◆口述
- * 2002.01.13 講演「音楽から見た『万葉集』」/明日香村万葉文化館
- * 2002.01.20 出演「京都の雅楽」『京のまち』/KBS-TV京都市提供番組 11時から30分放映
- * 2002.01.21 講演「文化の中の日本音楽」茨城県足利市民文化講座/足利市民文化ホール
- * 2002.02.03 講評「日本音楽部門」大阪府高校総合文化祭日本音楽部門/ワッハ上方

- * 2002.02.16 司会と問題提起「人間にとって楽器とは」日本伝統音楽研究センター第2回公開講座～人間と楽器～その1」大学コンソーシアム
- * 2002.03.03 解説「菊の朝」「秋風辞」「都十二月」「石橋」菊伊祇京子箏曲地歌演奏会第二部／河内長野ラブリールホール
- * 2002.03.30 解説「六段の調」「尾上の松」「新娘道成寺」「弥生一春のあしおと一」「夜々の星」飛山桂・飛山百合子ジョイントリサイタル／京都ウィングス
- * 2002.04.28 解説「春の曲」「みずうみの詩」「梅の宿」「御山獅子」「明治松竹梅」「花の功」「若菜」「春重ね」「根曳の松」「新青柳」「千代の鶯」「越後獅子」菊武潔・二代家元継承五十周年記念演奏会／サンケイホール
- * 2002.04.29 講演「京の近世邦楽」京都文化博物館特別展「都の音色」併催講演会／京都文化博物館
- * 2002.05.05 講評「全国箏曲コンクール」日本箏曲会連盟主催 岡山市民会館大ホール
- * 2002.05.06 曲目解説「六段の調」「荒城の月抄」「さくら舞曲」「富士」「神仙」「都の春」「たにし」「夢」「夏の曲」「蟬の曲」「千鳥の曲」「楓の花」「雲井九段」「九段の調」「ムー大陸」日本箏曲家連盟全国大会／岡山市民文大ホール
- * 2002.05.26 曲目解説「朝の海」「懐月調」「みずうみの詩」「旅愁演奏曲」「未の契」「ラテン・ナンバー」「道化師」「秋の調」加賀山菖山開軒五十周年および喜寿祝賀演奏会 福知山市民ホール
- * 2002.06.02～07 ディスクジョッキー「邦楽のたのしみ 一夏の情景」NHKラジオ第2放送／06.02 (再06.08)「初夏」、06.09 (再06.15)「夕涼み」、06.16 (再06.22)「川のしらべ」、06.23 (再06.29)「海のしらべ」、06.30 (再07.06)「蝉しぐれ」
- * 2002.06.22 トーク「宮城道雄とその作品」宮城道雄を偲ぶ箏のタペ／いずみホール
- * 2002.06.26 講演「菊原初子先生をお偲びして」(社) 当道音楽会主催 文化講演会／リバーサイドホテル
- * 2002.06.30 講演「竹の楽器について」亀岡国際交流センター
- * 2002.07.14 解説「残月」「月」「里の暁」「新浮舟」「四季の眺」「芥子の花」「墨絵の葦」「御園の松」「尾上の松」「四段砧」「玉川」「新青柳」「融」「松竹梅」「夜々の星」「七小町」「千代の鶯」第43回古典を勉強する会／守口エナジーホール
- * 2002.08.18 解説「秋霖譜」「箏独奏のための練習曲」「奥州薩慈」「絵本太閤記 十段目尼ヶ崎閑居の場」。鼎談「邦楽これまで、これから」(青木鈴慕・中島靖子と) 第8回全国学生邦楽フェスティバル邦楽鑑賞会／京都市賀茂愛染倉
- * 2002.09.07 解説「難波獅子」「嵐山」「里の暁」「新浮舟」「茶音頭」「けしの花」「桜尽し」「新娘道成寺」「秋の言の葉」第13回当道友楽会地歌・箏曲演奏会「祥門会」／国立音楽劇場
- * 2002.09.08 解説「四方の海」「若葉」「朝霧」「寒砧」「摩周湖の幻想」「日本民謡めぐり」「岡康砧」「韓国ファンタジー」「園の四季」「みだれ」「雪」「残月」「片足鳥居の映像」「風動」「尾上の松」「宵宮から本宮へ」文化庁後援日本尺八連盟全国演奏大会／旭川大雪クリスタルホール
- * 2002.10.18 解説「園の秋」「萩の露」「残月」菊武厚詞リサイタル『秋絵巻』／国立文楽劇場小ホール
- * 2002.10.19 解説「有子」「静」「紅葉」「狐嫁調」「雲井曲」京極流演奏会百一年記念／福井ハーモニー・ホール
- * 2002.10.26 解説「ゆれる秋」「枯野砧」「連なる」「物は尽くし」馬場尋子リサイタル／紀尾井小ホール
- * 2002.11.03 解説「The moon in the sky」「海のアラベスク」「黒髪」「越後獅子」京都府古典芸能振興公演「第三回 箏・三絃リサイタル 山口朋子・DUO 今、むかし」京都府加茂町文化センターあじさいホール
- * 2002.11.25～11.29 連日全五回 ゲストスピーカー出演 山川静夫の華麗なる招待席「四世竹本津大夫」／NHKハイビジョン・BS2 12:15～14:45放映 第一回「花上野誉碑 志渡寺の段」第二回「摂州合邦辻 合邦住家の段」、第三回「近江源氏先陣館 盛綱陣屋の段」、第四回「御所桜堀川夜討 弁慶上使の段」「本朝廿四孝 勘助住家の段」、第五回「壺坂観音霊験記 沢市内より壺坂寺の段」「桜鏝恨鮫鞘 鰻谷の段」
- * 2002.12.1 解説と司会「弦(いと)がつなぐAsian Music」ヒューマンステージ in キョウト2002／京都都会館第2ホール

- * 2002.12.24 企画・講師「体験で知る箏・三味線の効果的指導方法」日本伝統音楽研究センター公開実践講座／京都市芸術センター
- * 2003.07.05 曲目解説「新娘道成寺」「融」「越後獅子」「吾妻獅子」「笹の露」「御山獅子」「夜々の星」「五段砧」「若菜」「新浮舟」「秋の曲」古典を勉強する会／エナジーホール
- * 2003.09.06 曲目解説「深夜の月」「玉の台」「六段の調」「磯千鳥」「夕顔」「七小町」「残月」「狹筵」「雲雀の曲」菊武祥庭五十回忌追善演奏会／国立文楽劇場
- * 2003.10 トーク「浄瑠璃と創作・舞踊と座敷舞」上方浄瑠璃と創作舞踊／京都市芸術センター
- * 2003.12.20 トーク「雪の晨」「八段調」「葵の上」山田流箏曲亀山香能 talk & live／新宿タベルナ
- ◆ 対外活動
 - * 滋賀大学大学院教育学研究科非常勤講師
 - * 京都コンサートホール運営委員
 - * 京都の秋実行委員
 - * 京都市芸術文化特別奨励制度委員
 - * 京都市芸術センター運営委員
 - * 奈良秋篠音楽堂運営委員
 - * 奈良市国際音楽交流評議会理事
 - * 大阪21世紀協会企画運営委員
 - * 文化審議会文化財分科会専門委員
 - * 日本芸術文化振興基金運営委員会専門委員
 - * 国立文楽劇場文楽技芸員評定委員
 - * 社団法人東洋音楽学会副会長・機関誌編集委員長
 - * 日本歌謡学会会員
 - * 楽劇学会会員
 - * 日本音楽学会会員
 - * 日本民俗音楽学会会員
- ◆ 調査活動 略
- ◇ 田井 竜一
 - ◆ 著作活動
 - * 2003.03.31 論文「第2章 近江の曳山囃子」、滋賀県水口町立歴史民俗資料館編『水口曳山囃子Ⅱ 一曳山（やま）を囃し・人を囃し・町を囃すー』滋賀、滋賀県水口町教育委員会、12センチCD2枚付CDブック、pp. 12-18
 - * 2002.11.20 研究ノート『『祇園囃子』をめぐって』、『京都市文化観光資源保護財団 会報』（財団法人京都市文化観光資源保護財団）NO. 84、pp. 2-4
 - * 2003.03.31 CDブック、滋賀県水口町立歴史民俗資料館編『水口曳山囃子Ⅱ 一曳山（やま）を囃し・人を囃し・町を囃すー』滋賀、滋賀県水口町教育委員会、12センチCD2枚付CDブック（「第3章 水口曳山囃子の口譜（口唱歌）」「CDの収録内容について」『文献資料・音響資料・映像資料』の分担執筆、pp. 19-32、pp. 48-49、pp. 50-52、およびCDの録音・構成）
 - * 2002.06.15 テキスト「オセアニアの民族音楽」、伝統文化コーディネーター検定委員会監修、財団法人 民族芸術交流財団編『伝統文化コーディネーター 初級公式テキスト』東京、そうよう、pp. 87-101
 - * 2002.05.20 解説「オセアニアの音楽芸能」、星川京児編『世界の民族音楽ディスクガイド』東京、音楽之友社、pp. 285-287
 - * 2002.08.20 書評「塚田健一著『アフリカの音の世界 ー音楽学者のおもしろフィールドワーカー』東京：新書館』、『東洋音楽研究』第67号、pp. 128-131
 - * 2002.05.20 CD評「南太平洋の音楽 ー最後の楽園ー、ワーナー WPCS-10750」「Iles Salomon: Musique de Guadalcanal, OCORA C 580049」「祈りの島：映画『シン・レッド・ライン』の音楽、BMG-RCA BVCF-31030」「ハワイアン・チャントハワイ／古代祈りのうた ークム・フラ・ジョン・ケオラ・ラケとナ・ワア・ララニ・カフナー、ピクチャーエンタテイメント VICG-60349」「Australia: Aboriginal Music, UNESCO Collection. Music and Musicians of the World. AUIDIS-UNESCO D 8040」、星川京児編『世界の民族音楽ディスクガイド』東京、音楽之友社、pp. 288-289
 - * 2002.05.20 CD紹介「地球の風音：オセアニアのCD」、星川京児編『世界の民族音楽ディスクガイド』東京、音楽之友社、p. 290
 - * 2002.09.30 エッセイ「オセアニア（1）：オセアニアの音楽芸能と楽器」、『おんがくういくり：おんがく世界めぐり』（インターネット・エッセイ）、<http://www2.yamaha.co.jp/u/world/index48.html>
 - * 2002.10.07 エッセイ「オセアニア（2）：究極の『楽器』ー身体打奏と水音遊びー」、『おんがくういくり：おんがく世界

- めぐり』(インターネット・エッセイ)、
<http://www2.yamaha.co.jp/u/world/index49.html>
- * 2002.10.14 エッセイ「オセアニア(3): 竹の響き—ソロモン諸島のバンバイブス合奏—」、『おながういくり: おながく世界めぐり』(インターネット・エッセイ)、<http://www2.yamaha.co.jp/u/world/index50.html>
 - * 2002.10.21 エッセイ「オセアニア(4): 鼻笛の話」、『おながういくり: おながく世界めぐり』(インターネット・エッセイ)、<http://www2.yamaha.co.jp/u/world/index51.html>
 - * 2002.10.28 エッセイ「オセアニア(5): シロアリのつくった楽器—オーストラリア先住民アボリジナルのディジェリドゥー—」、『おながういくり: おながく世界めぐり』(インターネット・エッセイ)、<http://www2.yamaha.co.jp/u/world/index52.html>
 - * 2003.03.20 エッセイ「山・鉾・屋台の祭りと囃子の研究」、『歴博』(国立歴史民俗博物館) 第117号、p. 17
 - * 2002.01.10 報告「第52回大会レポート: 研究発表C」、『(社)東洋音楽学会 会報』第54号、pp. 3-4
 - * 2002.02.17 報告「日本ポピュラー音楽学会第14回大会報告: 個人発表B [前半]」、JASPM NEWSLETTER (日本ポピュラー音楽学会) 第55号、pp. 7-8
 - * 2002.06 討論参加、藤井知昭責任編集『中部高等学術研究所共同研究会 イスラム文化の諸相』、Chubu Institute for Advanced Studies、Studies Forum Series 11、愛知、中部高等学術研究所
 - * 2003.05 討論参加、藤井知昭責任編集『中部高等学術研究所共同研究会 アジアにおける文化クラスター(I) —ラーマヤナの地域変容—』、Chubu Institute for Advanced Studies、Studies Forum Series 19、愛知、中部高等学術研究所
 - * 2002.06.05 CD解説・翻訳『オーストラリア・アボリジナルの音楽』(アルバトロス名盤復刻30選)、キングレコード KICC-5774
 - ◆ 口述活動
 - * 2002.06.15 解説「民族芸術の多様性と独自性」、伝統文化コーディネーター検定 検定対策セミナー、ばるるプラザ京都会議室
 - ◆ 調査・取材活動
 - * 継続中 水口曳山囃子調査、京都祇園祭り 菊水鉾囃子調査
 - * 2002.02.07~08 水口曳山囃子CD編集 (東京、東芝EMIスタジオ)
 - * 2002.05.14~16 城端曳山祭り調査
 - * 2002.05.25~26 東城町塩原の大山供養田植調査
 - * 2002.07.01~17 京都祇園祭り北観音山囃子調査
 - * 2002.08.04 石取り祭り調査
 - * 2002.08.22 桂地蔵前六齋念仏調査
 - * 2002.10.25 上野天神祭り調査
 - * 2002.11.23~24 比婆荒神神楽調査 (広島県東城町)
 - * 2003.03.01~02、08~09、15~16、23 石取り祭り調査
 - * 2003.07.16 石取り祭り調査
 - * 2003.07.17 京都祇園祭り北観音山囃子調査
 - * 2003.08.01~03 石取り祭り調査
 - * 2003.10.02 京都祇園祭り北観音山囃子調査
 - * 2003.10.08、23 桂地蔵前六齋念仏調査
 - * 2003.10.18~19 岩船シャギリ祭り調査
 - * 2003.11.10、17 桂地蔵前六齋念仏調査
 - * 2003.12.14 水口ばやし八妙会調査
 - * 2003.12.17 春日若宮おん祭り見学
 - ◆ 対外活動
 - * くらしき作陽大学音楽学部・作陽短期大学音楽科非常勤講師
 - * ~2002.03.31、2003.04.01~ 香川大学教育学部非常勤講師
 - * 2002.04.01~2003.03.31 広島大学教育学部非常勤講師
 - * (社)東洋音楽学会理事(2002.10.30~)、情報委員会委員、改革検討委員会委員(~2002.10.30)、選挙管理委員会委員(2002.04~10)
 - * ~2002.12.07 日本ポピュラー音楽学会研究活動委員会委員
 - * Member of the Editorial Board, *Perfect Beat: The Pacific Journal of Research into Contemporary Music and Popular Culture*
 - * 2003.04~ 国立民族学博物館共同研究員
 - * 中部高等学術研究所共同研究員
 - * ~2003.03.31 堺国際芸術芸能フェスティバル実行委員会 有識者懇話会委員(堺市)
 - * ~2003.03.31 「水口曳山囃子保存活用事業」に係る調査委員(滋賀県水口町)

* 2002.08 ~ 春日神社の石取祭調査団員
(桑名市教育委員会)

* 所属学会: (社) 東洋音楽学会、日本オセアニア学会、日本音楽学会、日本ポピュラー音楽学会、日本民族学会、民族芸術学会、International Council for Traditional Music, Society for Ethnomusicology

◇高橋 美都

◆著述活動

* 曲目解説ほか

・ 2003.05.31 『国立劇場 平成15年5月
雅楽公演「管絃渡物一季節の音を聴く」』、「渡物について」「平調と盤渉調による朗詠(春過、一声)」「杵越調と双調による管絃(陵王、胡飲酒破、新羅陵王急)』

◆口述活動

* 研究発表

・ 2002.03.28 「日本伝統音楽研究センターの収蔵楽器の現状と収蔵品管理システムの導入に関して」 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター「楽器の復元に関する総合研究」プロジェクト補足研究会 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター

* 研究計画提示

・ 2003.05.27 「寺社の祭礼に関わる舞楽の伝承研究、研究計画案」京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター「寺社の祭礼に関わる舞楽の伝承研究」共同研究会第1回研究会 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター

◆調査・取材活動

* 楽器調査

・ 2002.01.25 ~ 27 宮内庁三の丸尚蔵館 楽器調査(統括責任者: 東京文化財研究所音楽舞踊研究室長高桑いづみ氏)

・ 2002.02.28 奈良文化財研究所琴柱調査(統括責任者: 東京文化財研究所音楽舞踊研究室長高桑いづみ氏)

・ 2002.07.16 ~ 17 山口県琵琶調査(統括責任者: 東京文化財研究所音楽舞踊研究室長高桑いづみ氏)

・ 2002.08.06 ~ 07 福岡県琵琶調査(統括責任者: 東京文化財研究所音楽舞踊研究室長高桑いづみ氏)

・ 2003.01.07 ~ 10 宮内庁三の丸尚蔵館 楽器調査(統括責任者: 東京文化財研究所音楽舞踊研究室長高桑いづみ氏)

・ 2003.07.22 ~ 25 宮内庁三の丸尚蔵館

楽器調査(統括責任者: 東京文化財研究所音楽舞踊研究室長高桑いづみ氏)

・ 2003.10.08 宮内庁三の丸尚蔵館蔵の尾琴調査(統括責任者: 東京文化財研究所音楽舞踊研究室長高桑いづみ氏)

・ 2003.07.29 多賀城市埋蔵文化センター市川橋遺跡出土 9世紀の竹製の横笛

・ 2003.10.25 福山市鞆の浦歴史民俗資料館 安国寺の胎内笛

* 芸能調査

・ 2002.04.07 静岡県森町雨宮神社舞楽

・ 2002.04.22 天王寺聖霊会舞楽

・ 2002.04.24 新潟県能生町白山神社舞楽

・ 2002.04.27 春日若宮御遷座記念舞楽

・ 2002.10.22 天王寺経供養舞楽

・ 2003.05.11 春日大社薪お能

・ 2003.10.22 天王寺経供養舞楽

・ 2003.12.17 春日若宮おん祭

◆対外活動

* 廣瀬量平代表 科学研究費基礎研究C「日本伝統音楽所用楽器のデジタルアーカイヴ化計画」研究分担者(2002~3年度)

* 高桑いづみ代表 科学研究費基礎研究C「古楽器の形態と音色に関する総合研究」研究分担者(2002~3年度)

* 上三郷祐康代表 科学研究費基礎研究B「日本伝統音楽文献データベース作成」研究協力者(2001年度)

* 京都大学大学院人間・環境学研究所非常勤講師「特殊講義VI M」(前期課程対象)と「集中講義VI D」(後期課程対象)副題「日本伝統音楽の楽器」(2002年9月集中講義)

* 所属学会: 東洋音楽学会、日本歌謡学会、中世歌謡研究会、芸能史研究会、楽劇学会、民族芸術学会、民俗芸能学会、民俗音楽学会、国際音楽資料情報協会

◇スティーヴン・G・ネルソン

◆著作活動

* 編著書

・ 2003.09.10 *Annotated bibliography of the major publications of Dr. Kishibe Shigeo: In celebration of his ninetieth birthday* (『牟寿記念 岸辺成雄博士主要業績解題目録』) Tōkyō: Kishibe Shigeo Hakushi Sotsuju Kinen Jigyō Iinkai. 72 pp.

* 論文

・ 2002 “Historical source materials” (「(日本の)音楽史料」) PROVINE, Robert C.,

- Yosihiko TOKUMARU, and J. Lawrence WITZLEBEN, ed., *East Asia: China, Japan, and Korea*, pp. 585–590. New York and London: Routledge (*The Garland Encyclopedia of World Music* 7).
- 2003 “Shoomyoo: The Buddhist chant of Japan”(「声明 一日本の仏教聖歌一)Japan Society, ed. *Buddhist ritual chant from Korea and Japan*, pp. 12–23. New York: Japan Society.
 - 2003.03.31 「描かれた楽 一日本伝統音楽の歴史的研究における音楽図像学の有用性をめぐって一」/ “Depiction of *gaku*: Remarks on the value of music iconography in historical research on the traditional music of Japan” (和英両文) 東京文化財研究所編『第25回文化財の保存および修復に関する国際研究集会 一日本の楽器 一新しい楽器学へむけて』 104–122 頁 (和文)、24–41 頁 (英文) 東京: 東京文化財研究所
 - 2003.03.31 “The Kogoo no Tsubone episode of *The Tale of the Heike*, examined in the light of music history” (「音楽史から見た『平家物語』の「小督」) 『日本音楽史研究』第4号 (上野学園日本音楽史料室研究年報) i–xvi 頁 東京: 上野学園日本音楽資料室
 - 2003.03.31 (共著) 「史料紹介『びわのゆらい』(上野学園日本音楽資料室蔵) 影印・翻刻」 『日本音楽史研究』第4号 (上野学園日本音楽史料室研究年報) 53–96 頁 東京: 上野学園日本音楽資料室 青木洋志・磯水絵と共著
 - * 書評
 - 2002.08.20 「磯水絵 著『説話と音楽伝承』 『東洋音楽研究』67: 105–110 東京: 東洋音楽学会
 - 2002.10.10 「磯水絵 著『説話と音楽伝承』 『二松学舎大学 人文論叢』69: 143–148 東京: 二松学舎大学人文学会
 - 2003 “Magda Kyrova et al. *The Ear Catches the Eye: Music in Japanese Prints*”. *Imago Musicae* 20: 201–206.
 - * CD の英文解説
 - 2002 *Gagaku: “Gems from Foreign Lands”* (『雅楽「その唐玉を」』) 演奏: 東京楽所 音楽監督: 多忠輝 曲目: 国風歌舞《大歌》(音取、参音声、歌)、管絃(唐楽)《胡飲酒》(老越調音取、胡飲酒序、同破残楽三返)、管絃(高麗楽)《貴徳》(貴徳破、同急)、朗詠《春過》(老越調音取、春過)、催馬楽《安名尊》(双調音取、安名尊) Arizona, USA: Celestial Harmonies, 13217–2 32 pp.
 - 2003 *The art of the koto* Vol. 3: Works for *nijūgen* (『箏の芸術』第3巻 一二十絃の作品一) 演奏: 吉村七重、三橋貴風 曲目: 三木 稔《天如》、長沢勝俊《五つの小品——錦木によせて》、三木 稔《秋の曲》、西村 朗《七重》、佐藤聡明《神招琴》 Arizona: Celestial Harmonies, 13188–2 16 pp.
 - * CD 解説の英訳・英文解説
 - 2002 *Gagaku Suites* (『雅楽の一具』) 演奏: 伶楽舎 音楽監督: 芝祐靖 曲目: 管絃《三臺塩一具》(平調調子、序、破、急)、舞楽《春鶯囀一具》(壹越調調子、遊声、序、颯踏、入破、鳥声、急声) Arizona, USA: Celestial Harmonies, 13223–2 16 pp.
 - * 演奏会曲目解説
 - 2003.04.18 「吉村七重 箏リサイタル」プログラム 東京 紀尾井ホール 小ホール 曲目: 八橋檢校《四季の曲》、松阪春栄《楓の花》、伝八橋檢校《乱》、峰崎勾当《残月》
 - 2003.04.25/26 “About Daihannya Tendoku-e” and “Notes on Daihannya Tendoku-e.” Program notes. (真言宗豊山派、迦陵頻伽声明研究会ニューヨーク公演の曲目解説) Japan Society Hall, New York プログラム: 大般若転読会
 - 2003.10.24 「第12回 亀山香能箏曲演奏会」プログラム 東京 芝公園 abc 会館ホール 曲目: 鈴木鼓村《静》、初世中能島松声・三世山木太賀作作曲《松風》、山登万和作曲《須磨の風》
 - * 英訳
 - 2002.01.30 *Contemporary Japanese Music 8: The Work of NODA Teruyuki* / 『現代の日本音楽 第8集 野田暉行 作品』日本芸術文化振興会、国立劇場 調査育成部 調査資料課編 東京: 春秋社
 - 2002.04.28 ENDŌ Tōru, “The background of the melody of *Kimigayo*” (遠藤 徹「国家『君が代』の旋律の背景」 伝統文化鑑賞会「和歌の披講」(東京 国立劇場大劇場) プログラム pp. 31–24 東京・京都: 財団法人日本文化財団
 - 2002.10.10 *Contemporary Japanese Music 9: The Work of NIMI Tokuhide* / 『現代の日本音楽 第9集 新実徳英 作品』

- 日本芸術文化振興会、国立劇場 調査育成部 調査資料課編 東京：春秋社
- ・ 2003.01.30 *Contemporary Japanese music 10: The work of NISHIMURA Akira* / 『現代の日本音楽 第10集 西村朗 作品』 日本芸術文化振興会、国立劇場 調査育成部 調査資料課編 東京：春秋社
 - * 読み上げ原稿英訳
 - ・ 2002.11.03 TSUKAHARA Yasuko, “Aspects of *Gagaku* in the Late Nineteenth and Early Twentieth Centuries” (「近代日本における雅楽の位相」) Round Table 2: *Gagaku* and Studies of *Gagaku* in the 20th Century (ラウンド・テーブル2 雅楽と雅楽研究の20世紀) 日本音楽学会創立50周年記念国際大会「音楽学とグローバルセッション」 静岡 グランシップ静岡県コンベンション・アーツ・センター
 - ・ 2002.11.03 ENDŌ Tōru, “The Revival of Lost Repertoire and the Composition of New Works for the *Gagaku* Ensemble” (「雅楽の復興と新作をめぐる」) Round Table 2: *Gagaku* and Studies of *Gagaku* in the 20th Century (ラウンド・テーブル2 雅楽と雅楽研究の20世紀) 日本音楽学会創立50周年記念国際大会「音楽学とグローバルセッション」 静岡 グランシップ静岡県コンベンション・アーツ・センター
 - * その他
 - ・ 2002.03.31 エッセイ「香港2001 PNC 年次大会に参加して 一唐楽研究の今後」 『京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 所報』2: 25-29
 - ・ 2002.08.11 インタビュー フリージャーナリスト 加藤勝美 「風の行方 No. 36 京都で日本の伝統音楽を研究 スティーヴン・G・ネルソンさん」 『MK新聞』581: 6 京都：MK株式会社新聞部
 - ・ 2002.09.12 談話「想夫戀」 『山下和仁ギター・リサイタル』プログラム 東京：浜離宮朝日ホール
 - ・ 2002.12.03 エッセイ「第29回雅楽ゼミナール 外国人研究者から観た雅楽」 『第36回天王寺楽所 雅亮会 雅楽公演会』プログラム pp. 19-21 大阪：フェスティバルホール
 - ◆ 口述活動
 - * 研究発表
 - ・ 2002.02.04 “Murder and the transmission of secret pieces (*hikyoku*) in the Insei period” (「平安院政期における殺人事件と秘曲の伝承」) Kyoto Asian Studies Group 京都 スタンフォード日本センター
 - ・ 2002.03.21 「康和二年(1100)多氏殺害事件の背景と余波—平安院政期の音楽文化の諸相をめぐる—」 平安京文化研究会 第61回例会 京都 呉竹文化センター
 - ・ 2002.06.22 “Language, text forms, and musical style in standard Japanese Buddhist liturgy: as exemplified by the Shingon ritual form *Rishu Zanmai*” (「日本の仏教法会における言語、テキスト形式および音楽様式—真言宗「理趣三昧」を例として—」) Asian Studies Conference Japan 2002. Panel: Pious Performance in Medieval and Early Modern Japan 東京 上智大学市ヶ谷キャンパス
 - ・ 2002.10.04 “Reconstructing medieval Japanese ‘Songs of Paradise’: reconstruction as research and reception by Japanese performers and audiences” (「中世日本の『極楽声歌』の復元—研究としての復元、そして日本人奏者・聴衆の反応—」) Musicological Society of Australia XXV: *New Directions for a New Century*. Conservatorium of Music, University of Newcastle, Australia
 - ・ 2002.11.03 司会 Round Table 2: *Gagaku* and Studies of *Gagaku* in the 20th Century (ラウンド・テーブル2 雅楽と雅楽研究の20世紀) 日本音楽学会創立50周年記念国際大会「音楽学とグローバルセッション」 静岡 グランシップ静岡県コンベンション・アーツ・センター
 - ・ 2003.01.12 モデレーター パネル「音楽図像学の方法論をめぐる」 京都市立芸術大学日本伝統音楽センター研究プロジェクト「日本伝統音楽を対象とする音楽図像学の総合研究」 2002年度第2回研究集会
 - ・ 2003.01.27 “Saving Shigehira: Preparing a path to the Pure Land” (「重衡の救済—極楽浄土への導き—」) Kyoto Asian Studies Group 京都 スタンフォード日本センター
 - ・ 2003.04.26 “*Tazuneshirubeki kata arawanaru* (the way of reading [the scores] is clear): The informal concert at Genji’s fortieth-year jubilee (*Wakana Joo*)” (「尋ね知るべき方あらはなる」[(楽譜の)読み方は明らか]—光源氏四十賀の御遊び(若菜上)—」)

- New Perspectives on the *Tale of Genji*
Stanford University, Stanford, California
- ・2003.04.28 “Instrumental and vocal music at the Japanese Heian court: Recovering lost melodies and performance styles” (「平安時代の宮廷の器楽曲・声楽曲 一失われた旋律や演奏形態の再生一」) Music Department, University of California at Berkeley, Berkeley, California
 - ・2003.09.25 “The teaching of musicology in Japanese arts universities” (「日本の芸術大学における音楽学」) 国際日本文化研究センター第5回日本在住外国人研究者シンポジウム『Observing Japan from Within 内側から見た日本 一 在住外国人研究者の視点』京都 国際日本文化研究センター
 - ・2003.12.13 「平家語り生成試論 ールーツ(講式)への音楽的検証ー」 佛教文学会本部例会 小特集「平家物語とその周辺」京都 同志社女子大学今出川キャンパス
 - * 講演
 - ・2002.03.15 「絵画にみる日本の伝統楽器 ー絵師は何を描こうとしたかー」 大阪音楽大学付属楽器博物館 第13回ミュージアム・セミナー 大阪 大阪音楽大学付属楽器博物館
 - ・2002.07.03 「声明の響き 語りへの道」法政大学大学院/野上記念法政大学能楽研究所/エクステンション・カレッジ公開講座 第7回 法政大学能楽セミナー「能楽の源流を探る」東京 法政大学ポアソナート・タワー26階スカイホール
 - ・2002.07.07 「外国人研究者から見た雅楽」天王寺楽所 雅亮会 第29回雅楽ゼミナール 大阪 津村ホール(北御堂内)
 - ・2002.07.14 「琵琶弾きの経正 ー『竹生島詣』と『経正都落』ー」弘前NHK文化センター平家琵琶鑑賞教室 演奏:新井泰子 弘前市西茂森町 盛雲院本堂
 - ・2002.09.03 「日本音楽の中の声明 ー歴史と理論ー」平成14年度秋期大谷声明研修会 京都 ふれあいの里保養研修センター、ふれあい会館
 - ・2002.09.16 「平家詞曲『小督』(前半)と雅楽曲『想夫恋』」第36回声明と平家を楽しむ会 演奏:新井泰子(平家詞曲)・ステイーヴン・G・ネルソン(箏) 埼玉県三ヶ島 真言宗豊山派寶玉院本堂
 - ・2002.11.03 「重衡卿を極楽浄土へ導く ー『戒文』と『千手前』ー」弘前NHK文化センター平家琵琶鑑賞教室 演奏:新井泰子 弘前市西茂森町 盛雲院本堂
 - ・2002.11.23 「平家詞曲『小督』(後半)と雅楽曲『想夫恋』」第37回声明と平家を楽しむ会 演奏:新井泰子(平家詞曲)・ステイーヴン・G・ネルソン(箏) 埼玉県三ヶ島 真言宗豊山派寶玉院本堂
 - ・2002.12.07 「琵琶弾きの経正 ー『竹生島詣』と『経正都落』ー」京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 平成14年度第1回公開講座 演奏:新井泰子 京都市 法住寺阿弥陀堂
 - ・2002.12.08 「平家琵琶による極楽浄土への誘い ー法然と重衡ー」演奏:新井泰子 京都市 鹿ヶ谷法然院
 - ・2003.03.28 「外国人研究者からみた京都の伝統音楽」京都市教育委員会/(財)京都市生涯学習振興財団主催 ゴールデン・エイジ・アカデミー 京都 アスニ4階ホール
 - ・2003.04.13 「平家琵琶公演」演奏:新井泰子 東京 国分寺薬師堂
 - ・2003.05.10 フォーラム「民衆芸能と古典芸能」法政大学大学院国際日本学インスティテュート開設記念フォーラム 提議と討論 司会:田中優子 パネリスト:朴 鎔烈(パク・チョンユル)、ステイーヴン・G・ネルソン、安藤俊次、宜保榮治郎、中込重明 東京 法政大学ポアソナード・タワー26階スカイホール
 - ・2003.06.28 「歴史と説話 ー琵琶弾き経正と青山の琵琶ー」二松学舎大学人文学会第87回大会 平曲公演 演奏:新井泰子 千葉県柏市 二松学舎大学柏沼南校舎
 - ・2003.07.13 「重衡卿の最期 ー『重衡被斬』ー」弘前NHK文化センター平家琵琶鑑賞教室 演奏:新井泰子 弘前市西茂森町 盛雲院本堂
 - * 解説
 - ・2002.07.26 亀山香能 Talk & Live 東京新宿 La sala di TABERNA 曲目:二世山本檢校《夏の詠》、光崎檢校《秋風曲》、山田檢校《長恨歌曲》
 - ・2002.08.29 司会 山村楽正傘寿記念第10回道頓堀公演「山村楽正 舞わせてもらいます」大阪 松竹座 演目:地歌《閨の扇》、長唄《鶯娘》、長唄《連獅子》、大和楽《鐘》、地歌《山姥》、大和

- 楽《四季の花》、地歌《芦刈》、地歌《古道成寺》、地歌《珠取海女》、上方歌《ぐち》、地歌《からくりの》
- ・ 2002.11.24 「時空の旅 悠久の響き — 雅楽・声明・平曲 —」 文化の継承 平家音楽をめぐる学問／芸術／芸文 第7回演奏：宮田まゆみ、新井弘順、新井泰子、スティーヴン・G・ネルソン、篠原智子、矢部英美里、赤坂智子、平泉泰興 東京 東久留米市 聖グレゴリオの家聖堂
 - ・ 2002.12.13 第8回 山田流箏曲奏心会 東京 紀尾井小ホール 企画：亀山香能 曲目：久村検校《四季の友》、山田検校《江の島曲》、千代田検校《竹生島》、鈴木清寿《潮流》、中能島欣一《三絃・箏・尺八の為の二章》
- ◆ 放送出演
- ・ 2002.01.05 Weekend Square 「雅楽1000年の調べ」 NHK International
 - ・ 2002.03.25 イブニングミュージックライン「インストルメント・ファンタスティック」 NHK ラジオ大阪
 - ・ 2002.06.15 深夜便 25時のインタビュー「絵画から日本の伝統音楽を解明する — 音楽図像学の試み —」 NHK ラジオ大阪
- ◆ 演奏
- ・ 2002.02.03 「六輔・楽正・米朝の三ツ重ね」《笹の露》の箏を担当（三味線、菊原光治） 大阪 吹田市文化会館メイスター大ホール（第893回府民劇場 吹田芸術芸能フェスティバル）
 - ・ 2002.08.21 ITI（国際演劇協会）雅楽ワークショップ発表会 小野雅楽会の会員として《還城楽》・《越殿楽》の演奏に参加（鉦鼓を担当） 東京 国立劇場演芸場
- ◆ 調査・取材活動
- ◆ 対外活動
 - * 通年 上野学園日本音楽資料室共同研究員
 - * 通年 宗教法人寶玉院附属日本伝統音楽研究所非常勤講師「日本音楽史」
 - * 通年 国際音楽図像学誌 *Imago Musicae* の編集顧問
 - * 2002.06.09 ~ 国際音楽資料情報協会 (IAML) 日本支部役員（広報担当）
 - ・ 2002.09.17 編集『Newsletter — 国際音楽資料情報協会日本支部』第19号 東京：国際音楽資料情報協会 (IAML) 日本支部
 - ・ 2002.12.31 編集『Newsletter — 国際音楽資料情報協会日本支部』第20号 東京：国際音楽資料情報協会 (IAML) 日本支部
 - ・ 2003.07.17 編集『Newsletter — 国際音楽資料情報協会日本支部』第21号 東京：国際音楽資料情報協会 (IAML) 日本支部
 - ・ 2003.11.30 編集『Newsletter — 国際音楽資料情報協会日本支部』第22号 東京：国際音楽資料情報協会 (IAML) 日本支部
 - * その他
 - ・ 2002.08.11 ~ 21 通訳 ITI（国際演劇協会）伝統芸能ワークショップ vol. 14 《雅楽》
 - * 所属学会：東洋音楽学会、日本歌謡学会、日本音楽学会、佛教文学会、中世文学会、International Council for Traditional Music、Musicological Society of Australia、Association for Asian Studies、International Association of Music Libraries, Archives and Documentation Centres (IAML)、Society for Ethnomusicology、Society for Asian Music
- * 2002.04.14 宮内庁式部職楽部 春期雅楽演奏会
 - * 2002.04.22 四天王寺 聖霊会
 - * 2002.04.29 春日大社 宝物殿特別セミナー「王朝の優美にふれる」(展示:和琴・笙など新国宝特別公開)
 - * 2002.05.12 春日大社 薪御能
 - * 2002.08.08 四天王寺 篝の舞楽
 - * 2002.09.02~04 平成14年度秋期大谷声明研修会 京都 ふれあいの里保養研修センター、ふれあい会館
 - * 2002.11.22 宮内庁書陵部 展示「書写と装訂 一写す 裁つ 綴じる」

京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター

概要 2002

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターは、日本の社会に根ざす伝統文化を、音楽・芸能の面から総合的に研究することを旨とします。

古くから日本の地に起こり、外からの要素の受容を絶えず繰り返しつつも、独自の様相を今日に呈している日本の伝統的な音楽・芸能は、日本語と同じように、日本の、そして世界の貴重な宝です。これらは、維持継承させるべきものであると共に、新しい文化創造のための源泉として発展されるべきものである、との認識をもちます。

センターは日本の伝統的な音楽・芸能と、その根底にある文化の構造を解明し、その成果を公表し、社会に貢献するように努めます。そのために国内外の研究者・研究機関・演奏家と提携し、成果や情報を共有・交流する拠点機能の役割を果たします。

京都は1200年以上にわたって、日本における文化創造の核であり続けています。このセンターは、伝統的な音楽・芸能を中心とする研究分野で、重要な役割と使命を担い、その核になることを目指します。

◇センターの活動

◆資料の収集・整理・保存

■文献資料(図書、逐次刊行物、古文書、マイクロフィルムなどの複写・非印刷資料を含む)

■音響映像資料

■楽器資料

■絵画資料

■データベースなどの電子資料

◆日本の伝統的な音楽・芸能の個別研究

■専任研究員による個人研究

■特別研究員による特定のテーマの研究

■研究者に、その専門領域に即したテーマで依頼する研究

◆日本の伝統的な音楽・芸能の共同研究

■国内外の多くの研究者・演奏家の参加・協力を得て、学際的・国際的な視野で、センターが行う共同研究

■センターが外部と共同して行う調査研究

◆活動成果の社会への提供

■公開講座・セミナー等の開催

■紀要・所報・資料集などの出版

■インターネットなどの電子媒体による公開

◇研究の対象

◆伝統的芸術音楽の歴史・現状・未来をみずえる

明治までに成立した伝統音楽の展開と伝承
古代

祭歌歌謡と芸能(楽器等の考古学的遺物を含む)

上代・中古

仏教音楽(声明等)

宮廷の儀礼・宴遊音楽(雅楽等)

中世

仏教芸能(琵琶、雑芸、尺八等)

武家社会の芸能(能・狂言等)

流行歌謡(今様、中世小歌等)

近世

外来音楽(切支丹音楽、琴楽、明清楽)

劇場音楽(義太夫節・常磐津節等の浄瑠璃、長唄、歌舞伎囃子等)

非劇場音楽(地歌箏曲、三味線音楽、琵琶楽、尺八等)

流行歌謡(小唄、端唄等)

◆近代社会での伝統音楽の展開をみずえる

■伝統音楽の発展とその可能性に関する事象の研究

■伝統音楽の享受と教育に関連する事象の研究

◆広い視野で生活の音楽をみずえる

■民間伝承と日本関連諸地域及び先住民族の音楽・芸能の研究

■生活における音楽・芸能(わらべうた・民謡、祭礼音楽等の民俗芸能)の研究

◇専任研究員

(専門領域・現在の研究テーマ)

所長 廣瀬量平(作曲・現代邦楽論)

「縄文文化に由来する石笛とそれによってもたらされる音楽について」

「日本伝統音楽を基盤とした今日の音楽作品の研究」

教授 吉川周平(日本民俗音楽・舞踊学)

「神楽の総合的研究」

「盆踊りの総合的研究」

教授 久保田敏子(日本音楽史学)

「当道職屋敷およびその廃止後の三曲界研究」

「地歌・箏曲の作品研究」

助教授 田井竜一(民族音楽学・日本音楽芸能論)

「山・鉦・屋台の囃子の比較研究」

「囃し田の研究」

助教授 高橋美都(芸能史・日本音楽情報論)

「舞楽の比較研究」

「日本伝統楽器のデータベース作成」

助教授 スティーヴン・G・ネルソン(日

本音楽史学)

『順次往生講義』の総合研究
「初期の講義の音楽構成法について」

◇特別研究員

岡田万里子「江戸時代後期の上方面における歌舞伎音楽の研究」

小川佳世子「世阿弥晩年期の能についての研究」

中原香苗「中世楽書と音楽説話の伝承に関する研究」

山田智恵子「義太夫節地合の音楽学的研究—地合において規範となるもの—」

和田一久「筑紫箏の調弦法について」

◇委託研究員

伊野義博「地方舞楽における唱歌(しょうが)と身体表現に関する研究」

田島みどり「中国楽器の演奏場面の図像資料目録作成」

◇プロジェクト研究・共同研究

◆プロジェクト研究

■「日本伝統音楽を対象とする音楽図像学の総合研究」

研究代表者：スティーヴン・G・ネルソン

顧問：ティルマン・ゼーバス、福島和夫

プロジェクト研究員：秋田真吾、泉 武夫、入江宣子、遠藤 徹、大梶晴彦、岡田万里子、小川佳世子、小野 真、笠原 潔、加須屋 誠、勝村仁子、蒲生郷昭、吉川周平、久保田敏子、郡司すみ、薦田治子、坂本麻実子、志村 哲、杉崎貴英、田井竜一、高桑いづみ、高橋美都、竹内有一、田島みどり、谷本一之、中溝一恵、中安真理、野川美穂子、長谷川由美子、樋口 昭、樋口眞規子、富金原 靖、福原敏男、モニカ・ベーテ、宮崎まゆみ、山下裕二、山寺三知、由比邦子

◆共同研究

■「邦楽歌詞研究Ⅱ 一地歌・箏曲—」

研究代表者：久保田敏子

共同研究員：井口はる菜、小野恭靖、佐々木聖佳、鈴木由喜子、永池健二、西川 学、スティーヴン・G・ネルソン、野川美穂子、真鍋昌弘、山根陸宏

■「ダシの祭り」と囃子の諸相」

研究代表者：田井竜一

共同研究員：青盛 透、入江宣子、岩井正浩、植木行宣、垣東敏博、吉川周平、永原恵三、樋口 昭、福原敏男、増田 雄、米田 実

■「琴・箏の系譜—楽器、文献と奏法—」

研究代表者：スティーヴン・G・ネルソン

共同研究員：青木洋志、磯 水絵、遠藤 徹、久保田敏子、高橋美都、告井幸男、和田

一久

◇事務局

事務長：旭 昭治 担当係長：青木静夫

係員：才田典子

◇司書・研究補助員

司書：井口はる菜

研究補助員：伊藤志野、今井敏行、水落 学

◇設立の経緯

平成3年6月 世界文化自由都市会議推進検討委員会において、廣瀬量平委員が日本伝統音楽の研究施設の必要性を提言する

平成5年3月 新京都市基本計画「大学・学術研究機関の充実」の「市立芸術大学の振興」の項で、「邦楽部門の新設についても研究する」と言及

平成8年6月 京都市芸術文化振興計画「教育・研究機関の充実」で、日本の伝統音楽や芸能を研究・教育するための体制を整えることが提唱される

平成8年10月 京都市が伝統音楽調査会(会長：廣瀬量平名誉教授)に、伝統音楽研究部門の調査を委託する

平成8年12月 京都市の「もっと元気に・京都アクションプラン」の「文化が元気」の項目に、伝統音楽研究部門の設置が位置づけられる

平成9年4月 実施設計費及び地質調査経費 予算措置

平成10年4月 施設建設費 予算措置

平成10年10月 施設建設着工(工期17ヶ月)

平成11年9月 日本伝統音楽研究センター設立準備室を設置する(室長：廣瀬量平名誉教授)

平成12年2月 新研究棟竣工

平成12年4月 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター開設

平成12年12月 京都市立芸術大学新研究棟完成披露式挙行

◇施設

新研究棟6～8階

6階 センター所長室、事務室、センター会議室、資料室、資料管理室、個人研究室

7階 合同研究室(2)、楽器庫、貴重資料庫

8階 個人研究室(5)、研究員室(2)、視聴覚編集室、研修室(2)

(センター総面積 約1,500m²)

Research Centre for Japanese Traditional Music
Kyoto City University of Arts
2002

The Research Centre for Japanese Traditional Music was founded at the Kyoto City University of Arts on April 1, 2000, with the aim of undertaking comprehensive research on traditional music and performing arts within the society and culture of Japan.

In the more than one hundred years since the Meiji Restoration of 1868, Japan has followed a path of modernization and Westernization, which has become more pronounced in the fifty something years since the end of World War II. We have reached a time ripe for the reconsideration of Japan's traditional culture, and the development of new approaches to it. The founding of the Research Centre for Japanese Traditional Music at the Kyoto City University of Arts is of particular significance in view of the fact that Kyoto has long been the living centre of Japan's traditional culture.

Kyoto is rich in physical evidence of its traditional culture, what we may term a 'visual' heritage; with the establishment of this new body, however, the city authorities have demonstrated an attitude of respect towards its 'aural' heritage. As a new 'centre' for research on Japan's traditional music, the Research Centre aims to make a broad and significant contribution to the field of Japanese music, by means of sharing and exchanging information and the results of research with researchers, other research establishments, and performers, not only within Japan but throughout the world.

The Research Centre for Japanese Traditional Music thus hopes to link the past with the present through a unique range of activities in research and creation, within the wider context of Japan's traditional culture.

Activities of the Research Centre

A. Collecting, ordering, and preserving research materials of relevance to the study of Japan's traditional music and performing arts:

- (1) Documentary materials (books, periodicals, old documentary sources, copied and non-printed materials including microfilm, etc.)
- (2) Audio-visual materials
- (3) Instruments and related materials
- (4) Pictorial materials
- (5) Materials in electronic form, such as existing databases and the like

B. Individual research on Japan's traditional music and performing arts:

- (1) Research by individual members of the full-time staff
- (2) Research on particular themes by scholars employed as part-time research fellows
- (3) Research commissioned from scholars outside of the Research Centre on their fields of speciality

C. Team research on Japan's traditional music and performing arts:

- (1) Team research undertaken from an interdisciplinary and international perspective by research teams based at the Research Centre, formed for that purpose with the cooperation and participation of researchers and performers from both Japan and overseas
- (2) Surveys in collaboration with other bodies and/or individuals

D. Bringing the results of research to a wider audience through the following activities:

- (1) Public events including lecture series, seminars, workshops, and lecture-demonstrations
- (2) Publications including a regular newsletter, an annual bulletin, and collections of research materials
- (3) Electronic publications such as databases available for use online

Fields of Research

The research fields of the Research Centre encompass the past, present and future of Japan's traditional music:

- (1) The development and transmission of music prior to the Meiji Restoration of 1868

Prehistoric times

Religious song and performing arts (including archaeological study of surviving examples of instruments, etc.)

Ancient times

Buddhist music (*shoomyoo*, etc.)

Ceremonial and entertainment music of the court (*gagaku*, etc.)

Medieval times

Buddhist performing arts (*biwa*-accompanied narrative, *zoogei*, *shakuhachi*, etc.)

Performing arts of the warrior class (*noo*, *kyoogen*, etc.)

Popular song (*imayoo*, medieval *kouta*, etc.)

Pre-modern times

Music from foreign sources (so-called ‘Christian’ music, Chinese *qin* music in Japan, *minshingaku*)

Theatrical music (*gidayuu-bushi*, other types of *jooruri* including *tokiwazu-bushi*, etc., *nagauta*, *hayashi* music in *kabuki*, etc.)

Non-theatrical music (*jiuta sookyoku*, other *shamisen* genres, *biwa*-accompanied vocal genres, *shakuhachi*, etc.)

Popular song (*kouta*, *hauta*, etc.)

- (2) Developments in traditional music since the Meiji Restoration

The development of traditional music and its possibilities, including composition

The reception of traditional music and the place of traditional music in education

- (3) Music in daily life, in the broadest terms

Folk transmission and the music and performing arts of areas related to Japan and of its indigenous minorities

Music and the performing arts in daily life (children’s song and folk song; folk performing arts including festival music)

Full-time Research Staff

(Position, research fields and current research topics)

HIROSE Ryoohai (Director; Composition, Contemporary music for traditional instruments) Stone flutes of Jomon culture and

music that can be played on them; Japan’s traditional music as a source for creation

KIKKAWA Shuuhei (Professor; Japanese folk music and dance) Comprehensive research on *kagura*; Comprehensive research on *bon-odori*

KUBOTA Satoko (Professor; Historiography of Japanese music) Research on the *sankyoku* music world before and after the abolition of the Toodoo Shokuyashiki; Research on works of the *jiuta* and *sookyoku* repertoires

STEVEN G. NELSON (Associate professor; Historiography of Japanese music) Comprehensive research on the *Junshi oojoo kooshiki*; Research on the methods of musical construction employed in early performances of *kooshiki* texts

TAI Ryuuichi (Associate professor; Ethnomusicology, Japanese performing arts) Comparative research on the *hayashi* music of festival floats; Research on the *hayashida* folk music genre of the Chuugoku District

TAKAHASHI Mito (Associate Professor; History of the performing arts, Japanese music and information technology) Comparative research on central and peripheral *bugaku* dance traditions; Construction of a database on Japan’s traditional music instruments

Research Fellows

NAKAHARA Kanae: Research on music treatises and music tales of the medieval period

OGAWA Kayoko: Research on the late *noo* plays of Zeami

OKADA Mariko: Research on the *kabuki* music of the Kamigata region during the late Edo period

WADA Katsuhisa: The tuning of the *koto* in the *tsukushi-goto* tradition

YAMADA Chieko: Musicological research on *jiiai* in *gidayuu-bushi*: model patterns in *jiiai*

Commissioned Researchers

INO Yoshihiro: Research on *shooga* and bodily expression in regional *bugaku* traditions

TAJIMA Midori: Cataloguing depictions of instrumental performance in Chinese art

Team Research

Long-term Project

- (1) The music iconography of the traditional music of Japan

Project leader: Steven G. NELSON

Advisers: FUKUSHIMA Kazuo, Tilman SEEBASS

Members: AKITA Shingo, Monica BETHE,

ENDOO Tooru, FUKINBARA Yasushi,

FUKUHARA Toshio, GAMOO Satoaki,

HASEGAWA Yumiko, HIGUCHI Akira, HIGUCHI

Makiko, IRIE Nobuko, IZUMI Takeo,

KASAHARA Kiyoshi, KASUYA Makoto,

KATSUMURA Jinko, KIKKAWA Shuuhei,

KOMODA Haruko, KUBOTA Satoko,

MIYAZAKI Mayumi, NAKAMIZO Kazue,

NAKAYASU Mari, NOGAWA Mihoko, OGAWA

Kayoko, OKADA Mariko, ONO Makoto,

OOKAJI Haruhiko, SAKAMOTO Mamiko,

SIMURA Satosi (SHIMURA Satoshi), SUGISAKI

Takahide, TAI Ryuichi, TAJIMA Midori,

TAKAHASHI Mito, TAKAKUWA Izumi,

TAKEUCHI Yuuichi, TANIMOTO Kazuyuki,

YAMADERA Mitsutoshi, YAMASHITA Yuuji,

YUHI Kuniko

Regular Projects

- (1) Texts of Japanese vocal music II: *Jiuta-sookyoku*

Project leader: KUBOTA Satoko

Other members: IGUCHI Haruna, MANABE

Masahiro, NAGAIKE Kenji, Steven G.

NELSON, NISHIKAWA Manabu, NOGAWA

Mihoko, ONO Mitsuyasu, SASAKI Mika,

SUZUKI Yukiko, YAMANE Michihiro

- (2) Aspects of festivals employing festival floats and their *hayashi* music

Project leader: TAI Ryuichi

Other members: AOMORI Tooru, FUKUHARA

Toshio, HIGUCHI Akira, IRIE Nobuko, IWAI

Masahiro, KAKITOO Toshihiro, KIKKAWA

Shuuhei, MASUDA Takeshi, NAGAHARA

Keizoo, UEKI Yakinobu, YONEDA Minoru

- (3) The lineage of the Japanese zithers: the instruments, documentary materials, and performance techniques

Project leader: Steven G. NELSON

Other members: AOKI Hiroyuki, ENDOO Tooru,

KUBOTA Satoko, ISO Mizue, TAKAHASHI

Mito, TSUGEI Yukio, WADA Katsuhisa

Administrative Secretariat

Director: ASAHII Shooji; Chief: AOKI Shizuo;

Clerical Staff: SAIDA Noriko

Librarian and Research Assistants

Librarian: IGUCHI Haruna

Research Assistants: IMAI Toshiyuki, ITOO Shino,

MIZUUCHI Manabu

History

1991 The need for a new Kyoto centre for research on Japan's traditional music expressed by HIROSE Ryoohi at an international conference of the world's cities

1993 Expansion of the Kyoto City University of Arts proposed within the city's plans for its renewal

1996 Initial plans for the Research Centre and Doctoral Course within the graduate programme of the Faculty of Art tabled; preparatory committee for the Research Centre's founding established

1997 Budget allocated for planning the new building and surveying the site

1998 Construction begun (completed early 2000)

2000 Commencement of activities (April); opening ceremony (December 2)

Facilities

The Research Centre for Japanese Traditional Music is situated on the 6th to 8th floors of the University's Shinkenkyuutoo (New Research Building), with a total area of approx. 1500m².
6th floor: director's office, administration, committee meeting room, reference library, materials management room, individual office

7th floor: seminar rooms (2), instrument store-room, special collection

8th floor: individual offices (5), fellows' rooms (2), audio-visual studio, training rooms (2)

京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター
概要 2003

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターは、日本の社会に根ざす伝統文化を、音楽・芸能の面から総合的に研究することを目指します。

古くから日本の地に起こり、外からの要素の受容を絶えず繰り返しつつも、独自の様相を今日に呈している日本の伝統的な音楽・芸能は、日本語と同じように、日本の、そして世界の貴重な宝です。これらは、維持継承させるべきものであると共に、新しい文化創造のための源泉として発展されるべきものである、との認識をもちます。

センターは日本の伝統的な音楽・芸能と、その根底にある文化の構造を解明し、その成果を公表し、社会に貢献するように努めます。そのために国内外の研究者・研究機関・演奏家と提携し、成果や情報を共有・交流する拠点機能の役割を果たします。

京都は1200年以上にわたって、日本における文化創造の核であり続けています。このセンターは、伝統的な音楽・芸能を中心とする研究分野で、重要な役割と使命を担い、その核になることを目指します。

◇センターの活動

- ◆資料の収集・整理・保存
- 文献資料（図書、逐次刊行物、古文献、マイクロフィルムなどの複写・非印刷資料を含む）
- 音響映像資料
- 楽器資料
- 絵画資料
- データベースなどの電子資料
- ◆日本の伝統的な音楽・芸能の個別研究
- 専任研究員による個人研究
- 特別研究員による特定のテーマの研究
- 研究者に、その専門領域に即したテーマで依頼する研究
- ◆日本の伝統的な音楽・芸能の共同研究
- 国内外の多くの研究者・演奏家の参加・協力を得て、学際的・国際的な視野で、センターが行う共同研究
- センターが外部と共同して行う調査研究
- ◆活動成果の社会への提供
- 公開講座・セミナー等の開催
- 紀要・所報・資料集などの出版
- インターネットなどの電子媒体による公開

◇研究の対象

- ◆伝統的芸術音楽の歴史・現状・未来をみする

明治までに成立した伝統音楽の展開と伝承
古代

祭祀歌謡と芸能（楽器等の考古学的遺物を含む）

上代・中古
仏教音楽（声明等）

宮廷の儀礼・宴遊音楽（雅楽等）

中世

仏教芸能（琵琶、雑芸、尺八等）

武家社会の芸能（能・狂言等）

流行歌謡（今様、中世小歌等）

近世

外来音楽（切支丹音楽、琴楽、明清楽）

劇場音楽（義太夫節・常磐津節等の浄瑠璃、長唄、歌舞伎囃子等）

非劇場音楽（地歌箏曲、三味線音楽、琵琶楽、尺八等）

流行歌謡（小唄、端唄等）

◆近代社会での伝統音楽の展開をみする

■伝統音楽の発展とその可能性に関する事象の研究

■伝統音楽の享受と教育に関連する事象の研究

◆広い視野で生活の音楽をみする

■民間伝承と日本関連諸地域及び先住民族の音楽・芸能の研究

■生活における音楽・芸能（わらべうた・民謡、祭礼音楽等の民俗芸能）の研究

◇専任研究員

所長 廣瀬量平（作曲・現代邦楽論）

「縄文文化に由来する石笛とそれによってもたらされる音楽について」

「日本伝統音楽を基盤とした今日的音楽作品の研究」

教授 吉川周平（日本民俗音楽・舞踊学）

「神楽の総合的研究」

「盆踊りの総合的研究」

教授 久保田敏子（日本音楽史学）

「明治以降の邦楽研究」

「地歌・箏曲の作品研究」

助教授 田井竜一（民族音楽学・日本音楽学論）

「山・鉾・屋台の囃子の比較研究」

「囃し田の研究」

助教授 高橋美都（芸能史・日本音楽情報論）

「舞楽の比較研究」

「日本伝統楽器のデータベース作成」

助教授 スティーヴン・G・ネルソン（日本音楽史学）

「『順次往生講式』の総合研究」

「初期の講式の音楽構成法について」

◇非常勤講師

◆特別研究員

小川佳世子「世阿弥晩年期の美意識と音曲論についての研究」

告井幸男「摂政期における楽人の研究」

山田智恵子「義太夫節の近代」

和田一久『平安中期音楽記事編年』の作成」

◆情報管理員

東 正子「ネットワーク管理とホームページ管理」

◇事務室

事務長：旭 昭治 担当係長：青木静夫

係員：才田典子

◇司書・研究補助員

司書：井口はる菜

研究補助員：伊藤志野、川和田晶子、光本健吾

◇プロジェクト研究・共同研究

◆プロジェクト研究

■「日本伝統音楽を対象とする音楽図像学の総合研究」(15年度は16年度以降にむけてのワーキング・セッションとする)

研究代表者：スティーヴン・G・ネルソン
顧問：ティルマン・ゼーバス

ワーキング・メンバー：青木陽子、泉 武夫、遠藤 徹、小川佳世子、勝村仁子、蒲生郷昭、郡司すみ、薦田治子、杉崎貴英、高橋美都、竹内有一、田島みどり、谷本一之、中溝一恵、中安真理、野川美穂子、長谷川由美子、樋口 昭、樋口眞規子、モニカ・ベアテ、山寺三知、由比邦子

■「民俗芸能における神楽の諸相」

研究代表者：吉川周平

プロジェクト研究員：植木行宣、片岡康子、小島美子、星野 紘、松永 建、松原武美、三村泰臣、宮田繁幸、茂木 栄、和田 修、渡辺伸夫

◆共同研究

■「邦楽歌詞研究Ⅲ 一地歌・箏曲一」

研究代表者：久保田敏子

共同研究員：井口はる菜、小野恭靖、佐々木聖佳、鈴木由喜子、永池健二、西川 学、野川美穂子、真鍋昌弘、山根陸宏

■「琴・箏の系譜 一楽器、文献と奏法一」

研究代表者：スティーヴン・G・ネルソン

共同研究員：磯 水絵、遠藤 徹、田中幸江、告井幸男、和田一久

■「寺社の祭礼に関わる舞楽の伝承研究」

研究代表者：高橋美都

共同研究員：秋田真吾、伊野義博、小野 真、酒井信好

◇委託研究

「音楽図像学目録・描き起こし図録のデータベース化」国立音楽大学楽器学資料館

「東明流に関する資料収集」平岡久治

◇設立の経緯

平成3年6月 世界文化自由都市会議推進検討委員会において、廣瀬量平委員が日本伝統音楽の研究施設の必要性を提言する

平成5年3月 新京都市基本計画「大学・学術研究機関の充実」の「市立芸術大学の振興」の項で、「邦楽部門の新設についても研究する」と言及

平成8年6月 京都市芸術文化振興計画「教育・研究機関の充実」で、日本の伝統音楽や芸能を研究・教育するための体制を整えることが提唱される

平成8年10月 京都市が伝統音楽調査会(会長：廣瀬量平名誉教授)、伝統音楽研究部門の調査を委託する

平成8年12月 京都市の「もっと元気に・京都アクションプラン」の「文化が元気」の項目に、伝統音楽研究部門の設置が位置づけられる

平成9年4月 実施設計費及び地質調査経費 予算措置

平成10年4月 施設建設費 予算措置

平成10年10月 施設建設着工(工期17ヶ月)

平成11年9月 日本伝統音楽研究センター設立準備室を設置する(室長：廣瀬量平名誉教授)

平成12年2月 新研究棟竣工

平成12年4月 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター開設

平成12年12月 京都市立芸術大学新研究棟完成披露式挙行

◇施設

新研究棟6～8階

6階 センター所長室、事務室、会議室、資料室、資料管理室、個人研究室

7階 合同研究室(2)、楽器庫、貴重資料庫

8階 個人研究室(5)、研究員室(2)、視聴覚編集室、研修室(2)

(センター総面積約1,500m²)

Research Centre for Japanese Traditional Music
Kyoto City University of Arts
2003

The Research Centre for Japanese Traditional Music was founded at the Kyoto City University of Arts on April 1, 2000, with the aim of undertaking comprehensive research on traditional music and performing arts within the society and culture of Japan.

In the more than one hundred years since the Meiji Restoration of 1868, Japan has followed a path of modernization and Westernization, which has become more pronounced in the fifty something years since the end of World War II. We have reached a time ripe for the reconsideration of Japan's traditional culture, and the development of new approaches to it. The founding of the Research Centre for Japanese Traditional Music at the Kyoto City University of Arts is of particular significance in view of the fact that Kyoto has long been the living centre of Japan's traditional culture.

Kyoto is rich in physical evidence of its traditional culture, what we may term a 'visual' heritage; with the establishment of this new body, however, the city authorities have demonstrated an attitude of respect towards its 'aural' heritage. As a new 'centre' for research on Japan's traditional music, the Research Centre aims to make a broad and significant contribution to the field of Japanese music, by means of sharing and exchanging information and the results of research with researchers, other research establishments, and performers, not only within Japan but throughout the world.

The Research Centre for Japanese Traditional Music thus hopes to link the past with the present through a unique range of activities in research and creation, within the wider context of Japan's traditional culture.

Activities of the Research Centre

A. Collecting, ordering, and preserving research materials of relevance to the study of Japan's traditional music and performing arts:

- (1) Documentary materials (books, periodicals,

old documentary sources, copied and non-printed materials including microfilm, etc.)

- (2) Audio-visual materials
- (3) Instruments and related materials
- (4) Pictorial materials
- (5) Materials in electronic form, such as existing databases and the like

B. Individual research on Japan's traditional music and performing arts:

- (1) Research by individual members of the full-time staff
- (2) Research on particular themes by scholars employed as part-time research fellows
- (3) Research commissioned from scholars outside of the Research Centre on their fields of speciality

C. Team research on Japan's traditional music and performing arts:

- (1) Team research undertaken from an interdisciplinary and international perspective by research teams based at the Research Centre, formed for that purpose with the cooperation and participation of researchers and performers from both Japan and overseas
- (2) Surveys in collaboration with other bodies and/or individuals

D. Bringing the results of research to a wider audience through the following activities:

- (1) Public events including lecture series, seminars, workshops, and lecture-demonstrations
- (2) Publications including a regular newsletter, an annual bulletin, and collections of research materials
- (3) Electronic publications such as databases available for use online

Fields of Research

The research fields of the Research Centre encompass the past, present and future of Japan's traditional music:

- (1) The development and transmission of music prior to the Meiji Restoration of 1868

Prehistoric times

Religious song and performing arts (including archaeological study of surviving examples of instruments, etc.)

Ancient times

Buddhist music (*shoomyoo*, etc.)

Ceremonial and entertainment music of the court (*gagaku*, etc.)

Medieval times

Buddhist performing arts (*biwa*-accompanied narrative, *zoogei*, *shakuhachi*, etc.)

Performing arts of the warrior class (*noo*, *kyoogen*, etc.)

Popular song (*imayoo*, medieval *kouta*, etc.)

Pre-modern times

Music from foreign sources (so-called 'Christian' music, Chinese *qin* music in Japan, *minshingaku*)

Theatrical music (*gidayuu-bushi*, other types of *jooruri* including *tokiwazu-bushi*, etc., *nagauta*, *hayashi* music in *kabuki*, etc.)

Non-theatrical music (*jiuta sookyoku*, other *shamisen* genres, *biwa*-accompanied vocal genres, *shakuhachi*, etc.)

Popular song (*kouta*, *hauta*, etc.)

(2) Developments in traditional music since the Meiji Restoration

The development of traditional music and its possibilities, including composition

The reception of traditional music and the place of traditional music in education

(3) Music in daily life, in the broadest terms

Folk transmission and the music and performing arts of areas related to Japan and of its indigenous minorities

Music and the performing arts in daily life (children's song and folk song; folk performing arts including festival music)

Full-time Research Staff

(Position, research fields and current research topics)

HIROSE Ryohei (Director; Composition, Contemporary music for traditional instruments) Stone flutes of Joomon culture and music that can be played on them; Japan's traditional music as a source for creation

KIKKAWA Shuuhei (Professor; Japanese folk music and dance) Comprehensive research on *kagura*; Comprehensive research on *bon-odori*

KUBOTA Satoko (Professor; Historiography of Japanese music) Research on Japanese traditional music in the modern era; Research on works of the *jiuta* and *sookyoku* repertoires

STEVEN G. NELSON (Associate professor; Historiography of Japanese music) Comprehensive research on the *Junshi oojoo kooshiki*; Research on the methods of musical construction employed in early performances of *kooshiki* texts

TAI Ryuichi (Associate professor; Ethnomusicology, Japanese performing arts) Comparative research on the *hayashi* music of festival floats; Research on the *hayashida* folk music genre of the Chuu-goku District

TAKAHASHI Mito (Associate Professor; History of the performing arts, Japanese music and information technology) Comparative research on central and peripheral *bugaku* dance traditions; Construction of a database on Japan's traditional music instruments

Research Fellows

OGAWA Kayoko: Research on the aesthetics and theories on music of Zeami in his late years

TSUGEI Yukio: Research on court musicians of the tenth and eleventh centuries

WADA Katsuhisa: Compilation of a chronology of music events of the tenth and eleventh centuries

YAMADA Chieko: *Gidayuu-bushi* in the pre-war modern era

System Administrator

HIGASHI Masako: Maintenance of the Centre's network and homepage

Librarian and Research Assistants

Librarian: IGUCHI Haruna

Research Assistants: ITOO Shino, KAWAWADA Akiko, MITSUMOTO Kengo

Administrative Secretariat

Director: ASAHI Shooji; Chief: AOKI Shizuo;
Clerical Staff: SAIDA Noriko

Team Research

Major Projects

The music iconography of the traditional music
of Japan

Project leader: Steven G. NELSON

Advisers: Tilman SEEBASS

Working session members: AOKI Yooko,
Monica BETHE, ENDOO Tooru, GAMOO
Satoaki, GUNJI Sumi, HASEGAWA Yumiko,
HIGUCHI Akira, HIGUCHI Makiko, IZUMI
Takeo, KATSUMURA Jinko, KOMODA Haruko,
NAKAMIZO Kazue, NAKAYASU Mari, NOGAWA
Mihoko, OGAWA Kayoko, SUGISAKI
Takahide, TAJIMA Midori, TAKAHASHI Mito,
TAKEUCHI Yuuichi, TANIMOTO Kazuyuki,
YAMADERA Mitsutoshi, YUHI Kuniko

Aspects of folk *kagura*

Project leader: KIKKAWA Shuuhei

Other members: HOSHINO Hiroshi, KATAOKA
Yasuko, KOJIMA Tomiko, MATSUBARA
Takemi, MATSUNAGA Ken, MIMURA
Yasuomi, MIYATA Shigeyuki, MOGI Sakae,
UEKI Yukinobu, WADA Osamu, WATANABE
Nobuo

Regular Projects

Texts of Japanese vocal music III: *Jiuta-*
sookyoku

Project leader: KUBOTA Satoko

Other members: IGUCHI Haruna, MANABE
Masahiro, NAGAIKE Kenji, NISHIKAWA
Manabu, NOGAWA Mihoko, ONO Mitsuyasu,
SASAKI Mika, SUZUKI Yukiko, YAMANE
Michihiro

The lineage of the Japanese zithers: the instru-
ments, documentary materials, and perfor-
mance techniques

Project leader: Steven G. NELSON

Other members: ENDOO Tooru, ISO Mizue,
TANAKA Yukie, TSUGEI Yukio, WADA
Katsuhisa

Comparative research on *bugaku* dance tradi-
tions in ritual performance

Project leader: TAKAHASHI Mito

Other members: AKITA Shingo, INO Yoshihiro,
ONO Makoto, SAKAI Nobuyoshi

Commissioned Research

Digitalization of a card catalogue of depictions
of instrumental performance in Japanese art
and an accompanying set of line drawings:
Gakkigaku Shiryookan (Collection for Or-
ganology), Kunitachi College of Music

Collection of materials on the *shamisen*-accom-
panied vocal genre *toomei-ryuu*: HIRAOKA
Hisaharu

History

1991 The need for a new Kyoto centre for re-
search on Japan's traditional music ex-
pressed by HIROSE Ryoohai at an interna-
tional conference of the world's cities

1993 Expansion of the Kyoto City University
of Arts proposed within the city's plans
for its renewal

1996 Initial plans for the Research Centre and
Doctoral Course within the graduate
programme of the Faculty of Art tabled;
preparatory committee for the Research
Centre's founding established

1997 Budget allocated for planning the new
building and surveying the site

1998 Construction begun (completed early
2000)

2000 Commencement of activities (April);
opening ceremony (December 2)

Facilities

The Research Centre for Japanese Traditional
Music is situated on the 6th to 8th floors of the
University's Shinkenkyuutoo (New Research
Building), with a total area of approx. 1500m².

6th floor: director's office, administration, meet-
ing room, reference library, materials man-
agement room, individual office

7th floor: seminar rooms (2), instrument store-
room, special collection

8th floor: individual offices (5), fellows' rooms
(2), audio-visual studio, training rooms (2)

編集後記

諸般の事情で、所報の第3号を2003年度内に作成できなかったため、今回第3・4合併号の形で、お届けすることになりました。発行が遅れたことを、お詫びいたします。

その間、複数の機関・個人の方々から、発行に関するお問い合わせをいただきました。このささやかな小冊子の持つ責任を感じている次第です。

2004年3月末で、センター初代所長の廣瀬量平先生が退任され、スタッフの一部も転出します。センターは4月から5年目を迎え、名実共に新たな段階に至ることになります。今後とも、センターへのご支援・ご鞭撻の程、どうかよろしくお願いいたします。

編集委員 田井 竜一
 スティーヴン・G・ネルソン

京都市立芸術大学
日本伝統音楽研究センター 所報 第3・4号
2004年3月31日発行
編集・発行人 京都市立芸術大学
 日本伝統音楽研究センター
 廣瀬 量平
〒610-1197 京都市西京区大枝杵掛町13-6
電話 075-334-2240
FAX 075-334-2241
E-mail rc-jtm@kcua.ac.jp
<http://www.kcua.ac.jp/jtm/>
印刷所 西湖堂印刷株式会社

Research Centre for Japanese Traditional Music

Kyoto City University of Arts
13-6 Ooe Kutsukakechoo, Nishikyooku
Kyoto, 610-1197, JAPAN
Tel +81-75-334-2240
Fax +81-75-334-2241
E-mail rc-jtm@kcua.ac.jp
<http://www.kcua.ac.jp/jtm/>

